

令和3（2021）年

植物防疫年報

令和4（2022）年3月

栃木県農業環境指導センター

目 次

第1章 病虫害発生予察事業等植物防疫関連事業の具体的内容

- 1 [病虫害発生予察事業](#)…………… 1
- 2 [指定有害動植物等発生予察効率化の推進](#)…………… 1
- 3 [病虫害侵入警戒調査](#)…………… 1
- 4 [病虫害防除員の設置](#)…………… 2

第2章 病虫害発生予察事業

- 1 [対象作物と有害動植物の種類](#)…………… 3
- 2 病虫害発生予察情報の提供
 - 1) [病虫害発生予察情報（令和3（2021）年1月～令和3（2021）年12月）](#)…………… 4
 - 2) [病虫害発生予察データ](#)…………… 5
 - 3) [病虫害発生予報](#)…………… 6
 - 4) [いちご病虫害情報](#)…………… 36
 - 5) [病虫害発生予察特殊報](#)…………… 56
 - 6) [植物防疫ニュース（速報）等](#)…………… 62
- 3 主要農作物病虫害の発生状況と原因解析（令和2（2020）年確定）
 - 1) [普通作物](#)…………… 87
 - 2) [野菜](#)…………… 89
 - 3) [果樹](#)…………… 93
 - 4) [花き](#)…………… 94
- 4 主要農作物病虫害の発生状況と原因解析（令和3（2021）年速報）
 - 1) [普通作物](#)…………… 95
 - 2) [野菜](#)…………… 97
 - 3) [果樹](#)…………… 99
 - 4) [花き](#)…………… 100
- 5 病虫害発生程度別面積
 - 1) [令和2（2020）年病虫害発生程度別面積（確定）](#)…………… 101
 - 2) [令和3（2021）年病虫害発生程度別面積（速報）](#)…………… 103
- 6 [病虫害診断同定結果](#)…………… 105
- 7 病虫害侵入警戒調査
 - 1) [チチュウカイミバエ・ミカンコミバエ種群・ウリミバエ・コドリンガ・アリモドキゾウムシ・アフリカマイマイ侵入警戒調査](#)…………… 120
 - 2) [りんご火傷病発生警戒調査](#)…………… 122
 - 3) [ウメ輪紋ウイルス発生警戒調査](#)…………… 122

第3章 予察調査

- 1 病虫害発生予察調査における地域区分図
 - 1) [市町と県地域区分図](#)…………… 123
 - 2) [農業振興事務所担当地域区分図](#)…………… 123

2	予察調査ほ場及び乾式予察灯等の設置状況	
1)	普通作物病虫害発生予察ほ場	124
2)	野菜病虫害発生予察ほ場	126
3)	果樹、花き病虫害発生予察ほ場	129
4)	乾式予察灯設置状況	130
5)	フェロモントラップ設置状況	131
6)	粘着板設置状況	134
3	各種調査結果	
1)	水稲病虫害調査結果	
(1)	病虫害発生予察ほ場における病虫害の発生状況	135
(2)	育苗箱における病害の発生状況	140
(3)	再生稲における黄萎病、縞葉枯病の発生状況	140
(4)	アメダスデータによるいもち病感染好適日の出現状況	141
(5)	大麦におけるヒメトビウンカ生息密度	143
(6)	ウンカ類、ヨコバイ類の越冬前密度	144
(7)	ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の経年変化	145
(8)	イネミズゾウムシの発生状況	146
(9)	イネドロオイムシの発生状況	148
(10)	ニカメイガの発生状況	149
(11)	病虫害発生予察ほ場における害虫発生状況(すくいとり調査)	151
(12)	斑点米カメムシ類の発生状況	153
(13)	水稲害虫の60W予察灯による誘殺数	162
(14)	ヒメトビウンカの黄色粘着板による誘殺数	168
2)	麦類病害調査結果	
(1)	病害発生予察ほ場における病虫害年次別発生状況	170
(2)	麦類縞萎縮病発生状況	170
(3)	赤かび病発生状況	170
3)	大豆病虫害調査結果	
(1)	病虫害発生予察ほ場における病虫害発生状況	171
(2)	病虫害発生予察ほ場における被害粒発生状況	174
(3)	吸実性カメムシ類のフェロモントラップによる誘殺数	175
(4)	コガネムシ類の予察灯による誘殺数	178
4)	野菜類病虫害調査結果	
(1)	いちご	180
(2)	トマト	181
(3)	なす	182
(4)	きゅうり	183
(5)	にら	184
(6)	ねぎ	185
(7)	たまねぎ	186
(8)	キャベツ	187
(9)	レタス	188

5) 果樹類病害虫調査結果	
(1) なし	189
(2) ぶどう	190
(3) りんご	191
6) 花き類病害虫調査結果	
(1) きく	192
7) その他調査結果	
(1) カメムシ類の誘殺数(斑点米カメムシ類除く)	194
(2) チョウ類のフェロモントラップによる誘殺数(ニカメイガ除く)	197
(3) 有翅アブラムシ類の黄色粘着板による誘殺数	212
(4) アザミウマ類の青色粘着板による誘殺数	214
4 主要農作物生育、作柄の概要	
1) 農作物生育状況	
(1) 普通作物	217
(2) 野菜	222
(3) 果樹	226
(4) 花き	227
2) 気象経過	228
3) 気象表	230
第4章 発生予察効率化調査	
1 薬剤感受性検定	
1) りんご褐斑病菌の薬剤感受性検定	232
2) 気象データを活用したヒメトビウンカ第一世代産卵最盛期の予測	234
第5章 農薬安全対策事業	
1 農薬安全使用推進事業	
1) 危害防止運動の推進	237
2) 農薬管理指導士等認定講習会の開催	237
3) 農作物等病害虫雑草防除指針の作成	237
4) 農薬販売者及び農薬使用者の取締状況	237
第6章 栃木県農業環境指導センターの概要及び沿革	
1 組織体制	239
2 業務内容	239
3 沿革	240

※本誌掲載の地図は『白地図 KenMap』を使用して作成しました。

第1章 病虫害発生予察事業等植物防疫関連事業の具体的内容

1 病虫害発生予察事業

植物防疫法第23条（国の発生予察事業）及び同法第31条（都道府県の発生予察事業）に基づき、指定有害動植物及び重要病虫害を対象として発生予察を行い、精度の高い発生予察情報の提供に努めた。

1) 指定有害動植物及び県重要病虫害の発生予察

指定有害動植物79種及び重要病虫害67種（いずれも類を含む）を対象に、乾式予察灯4か所、定点調査ほ202か所（水稲39か所、麦20か所、大豆15か所、果樹類25か所、野菜類96か所、きく7か所）及び巡回調査ほ等を定期的に調査するとともに、病虫害防除員、関係機関等との連携による現地情報や各種気象情報等を総合的に分析検討し、農作物の病虫害発生予察を行った。

2) 病虫害発生予察情報の提供

「植物防疫事業実施要領の運用について」（昭和60年8月26日付60農蚕第4430号通知）に基づき、「発生予報」を毎月1回提供したほか、「特殊報」を3回発表した。また、県独自の情報として「いちご病虫害情報」を毎月1回、「植物防疫ニュース」（速報）を12回発表した（令和3年1月～令和3年12月）。

これらすべての情報は「ホームページ」及び電子メールを活用し、関係機関・団体・生産者等に対し、迅速に提供した。

2 指定有害動植物等発生予察効率化の推進

精度の高い予察情報の提供と適正な病虫害防除を推進するため、発生予察手法の高度化や各種の調査を実施した。

1) 薬剤感受性（抵抗性）調査

①リンゴ褐斑病菌の薬剤感受性検定

2) 気象データを活用したヒメトビウンカ第一世代産卵最盛期の予測

3 病虫害侵入警戒調査

1) チチュウカイミバエ・ミカンコミバエ種群・ウリミバエ・コドリングア・アリモドキゾウムシ・アフリカマイマイ侵入警戒調査

我が国未発生のチチュウカイミバエの発生を警戒するため、侵入の危険性が高いと推察される地点に誘因トラップを設置して調査を行った。

2) りんご火傷病、ウメ輪紋ウイルス発生警戒調査

我が国未発生のりんご火傷病及びウメ輪紋ウイルスの発生を警戒するため、りんご、なしの発生予察調査地点及びうめの苗木等栽培園地で調査を行った。

4 病害虫防除員の設置

植物防疫法第33条に基づき、病害虫防除所の業務に関する現地情報及び協力を得るため、病害虫防除員（27名）を委嘱し、フェロモントラップを活用した害虫発生状況調査等を実施した。

令和3（2021）年度病害虫防除員設置状況

No	市町村名	フェロモントラップ							対象作物
		ニカメイガ	クモヘリカメムシ	ホソヘリカメムシ	チャバネアオカメムシ	ハスモンヨトウ	オオタバコガ	ナシヒメシンクイ	
1	宇都宮市				○				なし
2	上三川町	○							水稲
3	上三川町						○		いちご
4	鹿沼市					○			いちご
5	日光市			○					大豆
6	芳賀町					○			大豆
7	小山市					○			いちご
8	矢板市				○				りんご
9	矢板市		○						水稲
10	那須烏山市				○				なし
11	大田原市					○			大豆・いちご
12	那須町						○		なす
13	佐野市				○				なし
14	益子町			○					大豆
15	茂木町		○						水稲
16	市貝町	○							水稲
17	真岡市						○		なす
18	栃木市					○			トマト
19	下野市	○							水稲
20	壬生町						○		なす
21	野木町					○			みずな
22	さくら市			○					大豆
23	塩谷町					○			にら
24	高根沢町							○	なし
25	那珂川町						○		トマト
26	那須塩原市			○					大豆
27	足利市					○			いちご

第2章 病虫害発生予察事業

1 対象作物と有害動植物の種類

指定: 指定有害動植物(国の発生予察事業) 重要: 重要病虫害(県の発生予察事業)

対象作物名	種類	病虫害名
稲	指定	イネミズゾウムシ、コブノメイガ、セジロウンカ、ツマグロヨコバイ、トビイロウンカ、ニカメイガ、斑点米カメムシ類「ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ」、ヒメトビウンカ、フタオビコヤガ、稲こうじ病、いもち病、縞葉枯病、ばか苗病、もみ枯細菌病、紋枯病
	重要	イチモンジセセリ、イナゴ類、イナズマヨコバイ、イネドロオイムシ、苗立枯病、黄萎病、苗立枯細菌病
麦	指定	赤かび病、うどんこ病
	重要	さび病類、縞萎縮病、斑葉病、黒節病
大豆	指定	アブラムシ類、吸実性カメムシ類、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ
	重要	コガネムシ類、マメシンクイガ、シロイチモジマダラメイガ、フタスジヒメハムシ、紫斑病、べと病
なし	指定	アブラムシ類、シンクイムシ類、ハダニ類、ハマキムシ類、カメムシ類、黒斑病、黒星病
	重要	赤星病
ぶどう	指定	晩腐病、灰色かび病、べと病
	重要	アザミウマ類、ハマキムシ類、黒とう病、アブラムシ類、ハダニ類
りんご	指定	シンクイムシ類、ハダニ類、ハマキムシ類、黒星病、斑点落葉病
	重要	アブラムシ類、輪紋病、褐斑病、赤星病
トマト	指定	アブラムシ類、コナジラミ類、ハスモンヨトウ、疫病、灰色かび病、葉かび病
	重要	ハモグリバエ類、タバコガ類、モザイク病、黄化葉巻病、すすかび病、青枯病、萎凋病、うどんこ病
きゅうり	指定	アザミウマ類、アブラムシ類、コナジラミ類、ハスモンヨトウ、うどんこ病、褐斑病、灰色かび病、べと病
	重要	ハモグリバエ類、疫病、黄化えそ病、モザイク病
なす	指定	アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、オオタバコガ、灰色かび病、うどんこ病
	重要	コナジラミ類、ハモグリバエ類、タバコガ類、半身萎凋病、青枯病、すすかび病
いちご	指定	アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、うどんこ病、炭疽病、灰色かび病
	重要	コナジラミ類、萎黄病
キャベツ	指定	アブラムシ類、ハスモンヨトウ、コナガ、ヨトウガ、黒腐病、菌核病
	重要	モンシロチョウ、ヨトウムシ類
レタス	指定	アブラムシ類、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、オオタバコガ、ヨトウガ、灰色かび病、菌核病
	重要	軟腐病
たまねぎ	指定	アザミウマ類、白色疫病、べと病
	重要	さび病、黒斑病、ボトリチス葉枯病、灰色かび病、アブラムシ類、ネギハモグリバエ
ねぎ	指定	アザミウマ類、アブラムシ類、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、黒斑病、さび病、べと病
	重要	ハモグリバエ類、ネギコガ、萎縮病、軟腐病
にら	指定	-
	重要	アザミウマ類、ネダニ類、白斑葉枯病、軟腐病、さび病
きく	指定	アザミウマ類、アブラムシ類、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、白さび病
	重要	ハダニ類
作物共通	指定	オオタバコガ(Fトラップ・なす・レタス)、シロイチモジヨトウ(いちご・きく・大豆・なす・レタス、ねぎ)、ハスモンヨトウ(Fトラップ・いちご・きく・キャベツ・きゅうり・大豆・トマト・なす・ねぎ・レタス)、ヨトウガ(キャベツ・レタス)、コナガ(Fトラップ・キャベツ)、果樹カメムシ類(Fトラップ・なし)、リンゴコカクモンハマキ(Fトラップ)
	重要	-
指定有害動植物		総計 15作物 計79種(類を含む)
重要病虫害		総計 16作物 計67種()

2 病害虫発生予察情報の提供

1) 病害虫発生予察情報（令和3(2021)年1月～令和3(2021)年12月）

種類	発表回数	号数	備考（発表日）			
発生予報	12回	第10号 (2年度) ～第9号	1月22日	2月19日	3月19日	4月23日
			5月21日	6月18日	7月16日	8月20日
			9月17日	10月22日	11月19日	12月17日
いちご 病害虫情報	12回	第8号 (2年度) ～第7号	1月22日	2月19日	3月19日	4月23日
			5月21日	6月18日	7月16日	8月20日
			9月17日	10月22日	11月19日	12月17日

特殊報	3回	第1号	トビイロシワアリのなすほ場での発生について	7月29日
		第2号	うめ及びももにおける <i>Singaporea shinshana</i> （ヨコバイ科の一種）の発生について	9月15日
		第3号	ミナミアオムシの発生について	12月 6日
植物防疫 ニュース	12回	第15号	タマネギべと病の発生に注意しましょう	3月19日
		第1号	遅れずに麦類の赤かび病防除を行いましょう！	4月 2日
		第2号	クビアカツヤカミキリの早期発見と防除に努めましょう！	5月13日
		第3号	ヒメトビウンカの防除を実施し、イネ縞葉枯病を抑えましょう！	6月 7日
		第4号	イネ稲こうじ病の防除を実施し、品質低下を防ぎましょう！	7月 1日
		第5号	斑点米カメムシ類の動向に注意しましょう！	7月 7日
		第6号	いもち病が発生しています！ 発生状況をよく観察し、穂いもちへの移行を防ぎましょう	7月16日
		第7号	斑点米カメムシ類（特にクモヘリカメムシ）の発生に注意しましょう！	8月 2日
		第8号	リンゴ褐斑病と斑点落葉病が増えています	8月 3日
		第9号	イチゴ炭疽病の発生に注意しましょう	8月17日
		第10号	大豆のべと病の発生に注意しましょう！	8月18日
		第11号	イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の調査結果について	12月 8日
その他	3回	－	スクミリンゴガイに注意しましょう	1月
		－	サツマイモ基腐病に注意！	4月
		－	トマトキバガに注意！	12月

2) 病害虫発生予察データ

(1) BLASTAMによる葉いもち感染好適日の判定結果

対象作物	調査地点（気象庁観測点名）	調査期間
稲	那須、黒磯、大田原、塩谷、真岡、宇都宮、今市、鹿沼、小山、佐野	6～8月

(2) 害虫の誘殺数（センター調査）

対象作物	害虫名	調査方法	調査地点	調査期間
稲	ニカメイガ	フェロモントラップ ^o	宇都宮市、小山市	5～8月
	クモヘリカメムシ	フェロモントラップ ^o	宇都宮市、芳賀町	6～9月
	ツマグロヨコバイ ヒメトビウンカ アヒゲホリト ^o リクスカメ 等	60W 予察灯 (白熱灯)	大田原市、宇都宮市、小山市、栃木市	5～9月
大豆	ホソヘリカメムシ	フェロモントラップ ^o	宇都宮市、芳賀町、栃木市	5～9月
大豆・野菜	ハスモンヨトウ	フェロモントラップ ^o	宇都宮市、栃木市	4～11月
果樹	チャバ ^o 初カメムシ	フェロモントラップ ^o	宇都宮市、芳賀町	4～9月
	ナシヒメシンクイ	フェロモントラップ ^o	宇都宮市、芳賀町、那須烏山市	3～10月
	リンゴコカモンハマキ	フェロモントラップ ^o	宇都宮市、那須烏山市	5～10月
野菜・花き	オオタバコガ	フェロモントラップ ^o	宇都宮市、栃木市	4～11月
	コナガ	フェロモントラップ ^o	宇都宮市、栃木市	4～11月
	有翅アブラムシ類	黄色粘着板	宇都宮市、栃木市 大田原市	4～11月 4～10月
	アザミウマ類	青色粘着板	宇都宮市、栃木市 大田原市、真岡市、下野市	4～11月 4～10月

(3) 害虫の誘殺数（病害虫防除員等調査）

対象作物	害虫名	調査方法	調査地点	調査期間
稲	ニカメイガ	フェロモントラップ ^o	上三川町、市貝町、下野市	5～8月
	クモヘリカメムシ	フェロモントラップ ^o	茂木町、矢板市	6～8月
大豆	ホソヘリカメムシ	フェロモントラップ ^o	日光市、益子町、さくら市、那須塩原市	5～9月
大豆・野菜	ハスモンヨトウ	フェロモントラップ ^o	鹿沼市、芳賀町、小山市、大田原市、栃木市、野木町、塩谷町、足利市	6～10月
果樹	チャバ ^o 初カメムシ	フェロモントラップ ^o	宇都宮市、矢板市、那須烏山市、佐野市	5～9月
	ナシヒメシンクイ	フェロモントラップ ^o	高根沢町	4～10月

令和2(2020)年度 病害虫発生予報 第10号

令和3(2021)年1月22日
栃木県農業環境指導センター

天候の変化に対応した施設管理を行い、病害虫の発生を抑えましょう。

予想期間 1月下旬～2月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 ・発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は少ない(平年比0%：ほ場率、株率)。(－)
・向こう1か月の降水量は多く、日照時間は少ない見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・老化葉などを除去し、風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
・発病した果実、果梗等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
・予防を主体にアフエットフロアブル等を散布する。曇雨天時には、くん煙剤を使用する。
- (4) 備 考 ・[灰色かび病薬剤感受性結果①](#)、[②](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 いちご アブラムシ類

- (1) 発生予想 ・発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比110%：ほ場率、平年比125%：株率)。(±)
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は少ない見込み。(－～±)
- (3) 対 策 ・発生が見られる場合は、チェス顆粒水和剤等を散布する。

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 ・発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比76%：ほ場率、平年比55%：株率)。(±)
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は少ない見込み。(－～±)
- (3) 対 策 ・ほ場をこまめに観察し、低密度のうちに防除を行う。
・化学農薬をローテーション散布し、抵抗性の発達を抑制する。
・化学農薬の散布回数を減らすため気門封鎖剤や天敵製剤を積極的に活用する。また、気門封鎖剤は5日程度の間隔をおき、複数回散布すると効果が高い。
・葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。
- (4) 備 考 ・[ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

4 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 ・発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比103%：ほ場率、平年比133%：株率)。(±)
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は少ない見込み。(－～±)
- (3) 対 策 ・低密度のうちにマツチ乳剤[ミカキイアザミウマ]等のIGR剤を散布する。被害が大きくなるおそれがある場合には、スピノエース顆粒水和剤等を散布する。本剤はカブリダニ等の天敵に影響があるので、注意する。
- (4) 備 考 ・秋期にアザミウマ類の発生が多かった施設は、注意する。
・[防除のポイントNo.19](#)、[アザミウマ薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターHPに掲載中。

5 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想 ・発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い(平年比285%：ほ場率、平年比100%：株率)。(＋)
・向こう1か月の降水量は多く、日照時間は少ない見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を用いた通風により、施設内の湿度低下に努める。
・草勢低下は発生を助長させるので、適正な肥培管理を行う。
・発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
・予防を主体にダコニール1000等を葉裏にもよくかかるように散布する。
・発生が見られたらパレード20フロアブル等を散布する。

- (4) 備 考 ・抵抗性品種を侵す葉かび病菌レースが確認されているため、抵抗性品種の栽培ほ場でも発生に注意する。
 ・[葉かび病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

6 トマト 黄化葉巻病 (TYLCV)

- (1) 発生予想 ・発生量：やや多い
 (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い（平年比 108%：ほ場率、平年比 250%：株率）。（+）
 ・トマトのコナジラミ類の発生量は少ない（平年比 0%：ほ場率、葉率）。（-）
 ・向こう 1 か月の平均気温は高く、日照時間は少ない見込み。（コナジラミ類の発生一～土）
 (3) 対 策 ・黄色粘着板を設置し、媒介虫の成虫を捕殺する。また、コナジラミ類が見られる場合は、ベストガード水溶剤、コルト顆粒水和剤等を散布する。
 ・発病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ビニール袋などで密封し、枯死させてから処分する。
 ・耐病性品種も本病に感染すると、伝染源となるため、感受性品種と同様に適切な防除を行う。
 (4) 備 考 ・[防除のポイントNo.22](#)、[タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

7 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現 況	発生予想	作物名	病害虫名	現 況	発生予想
いちご	うどんこ病	少	やや少	にら	アザミウマ類	多	多
きゅうり	うどんこ病	並	やや多	きく	ハダニ類	平年並	平年並
	コナジラミ類	やや多	やや多				

○冬期のスクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）対策について

昨年、足利市・小山市・野木町の排水路等でスクミリンゴガイの生息が確認されました。スクミリンゴガイが見られている地域では、水稻作へ向けて越冬密度を下げる以下の対策を行いましょ。

- ・耕うんを行い物理的に破壊するとともに寒風にさらす
- ・水路の泥上げにより、越冬場所をなくし越冬個体を減らす

[スクミリンゴガイに注意しましょう](#)を当センターHPに掲載中。

○病害虫防除にあたっては、RACコードを参考に、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

○花粉媒介昆虫（ミツバチ、マルハナバチ）や天敵に対する影響日数を目安に薬剤を選択しましょう。

ミツバチ・天敵等に対する農薬の影響の目安①、②、③を栃木県農作物等病害虫雑草防除指針 参考資料に掲載中。<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/haishinfile/list/tochigi>

○11月1日から1月31日は、「栃木県農薬危害防止運動期間」です。農薬は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、正しく使いましょ。

1か月気象予報（予報期間1月23日から2月22日 1月21日気象庁発表）

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は、多い確率60%です。日照時間は、少ない確率50%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項 目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10%	30%	60%
降 水 量	10%	30%	60%
日 照 時 間	50%	30%	20%

詳しくは農業環境指導センター（Tel. 028-626-3086）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部 \(@tochigi_nousei\)](#)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。

令和2(2020)年度 病虫害発生予報 第11号

令和3(2021)年2月19日
栃木県農業環境指導センター

果菜類・花き類病虫害の今後の発生増加に注意しましょう。

予想期間 2月下旬～3月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 ・発生量： **やや少ない**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は少ない(平年比14%：ほ場率、平年比0%：株率)。(－)
・向こう1か月の降水量は平年並～多く、日照時間は少ない見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・老化葉などを除去し、風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
・発病した果実、果梗等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
・予防を主体にフルピカフロアブル等を散布する。曇雨天時に防除する場合には、くん煙剤を使用する。
- (4) 備 考 ・ [灰色かび病薬剤感受性結果①](#)、[②](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 いちご アブラムシ類

- (1) 発生予想 ・発生量： **平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比114%：ほ場率、平年比91%：株率)。(±)
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は少ない見込み。(－～±)
- (3) 対 策 ・発生が見られる場合は、ウララDF等を散布する。

3 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 ・発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い(平年比143%：ほ場率、平年比91%：株率)。(±)
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は少ない見込み。(－～±)
- (3) 対 策 ・低密度のうちにカウンター乳剤等のIGR剤を散布する。
・被害が大きくなるおそれがある場合には、ディアナSC等を散布する。本剤はカブリダニ等の天敵に影響があるので、影響日数を考慮して散布する。
- (4) 備 考 ・秋期にアザミウマ類の発生が多かった施設は、発生に注意する。
・ [防除のポイントNo.19](#)、[薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターHPに掲載中。

4 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 ・発生量： **平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比71%：ほ場率、平年比66%：株率)。(±)
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は少ない見込み。(－～±)
- (3) 対 策 ・ほ場をこまめに観察し、低密度のうちに防除を行う。
・抵抗性の発達を抑制するため、気門封鎖剤や天敵製剤を積極的に活用する。また、化学農薬を使用する場合はローテーション散布する。
・気門封鎖剤は5日程度の間隔をおき、複数回散布すると効果が高い。
・葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布すると効果的である。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 ・発生量： **平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比47%：ほ場率、平年比55%：株率)。(－)
・向こう1か月の降水量は平年並～多く、日照時間は少ない見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。多湿時は循環扇や暖房機等を用いた通風により、施設内の湿度低下に努める。
・発病葉、発病果や花弁は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
・発生状況に応じてピクシオDF等を葉裏にもよくかかるように散布する。

・微生物防除剤（ボトキラー水和剤等）は発病前～発病初期に使用する。また、低温条件では効果が出にくいので、施設内温度は10℃以上を確保する。

(4) 備考 ・[薬剤感受性検定結果①、②](#)を当センターHPに掲載中。

6 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想 ・発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量が多い（平年比 301%：ほ場率、平年比 150%：株率）。（+）
 ・向こう1か月の降水量は平年並～多く、日照時間は少ない見込み。（+）
- (3) 対策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。多湿時は循環扇や暖房機等を用いた通風により、施設内の湿度低下に努める。
 ・草勢低下は発生を助長させるので、適正な肥培管理を行う。
 ・発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
 ・発生が拡大する前にアフェットフロアブル等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備考 ・抵抗性品種を侵す葉かび病菌レースが確認されているため、抵抗性品種の栽培ほ場でも発生に注意する。
 ・[葉かび病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

7 きゅうり コナジラミ類

- (1) 発生予想 ・発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量が多い（平年比 427%：ほ場率、平年比 200%：株率）。（+）
 ・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は少ない見込み。（－～±）
- (3) 対策 ・密度が高くなると防除が困難になるので、ほ場内に黄色粘着板を設置する等、早期発見に努め、早期防除を行う。
 ・発生が見られたらトランスフォームフロアブル等を散布する。

8 なら アザミウマ類

- (1) 発生予想 ・発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量が多い。（+）
 ・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は少ない見込み。（－～±）
- (3) 対策 ・雑草はアザミウマ類の増殖場所となるので、ハウス内外の除草を行う。
 ・早期発見に努め、密度の低い時点でディアナSC等を散布する。

9 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 ・発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い（平年比 136%：ほ場率、平年比 212%：株率）。（+）
 ・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は少ない見込み。（－～±）
- (3) 対策 ・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
 ・葉裏をよく観察し、発生が認められたら下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に気門封鎖剤やコロマイト水和剤等を散布する。
- (4) 備考 ・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

10 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
いちご	うどんこ病	少	やや少	きゅうり	うどんこ病	やや少	平年並
トマト	コナジラミ類	やや少	やや少		褐斑病	平年並	やや多
きゅうり	べと病	やや多	多		アブラムシ類	平年並	平年並

次のページへ続く

○施設野菜類の微小害虫を発生初期に防除しましょう。

施設野菜のハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類、コナジラミ類等の微小害虫は、気温の上昇に伴い急増します。ほ場をこまめに観察し、発生初期の防除を心掛けましょう。

○病虫害防除にあたっては、RACコードを参考に、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

○花粉媒介昆虫(ミツバチ、マルハナバチ)や天敵に対する影響日数を目安に薬剤を選択しましょう。

「ミツバチ・天敵等に対する農薬の影響の目安(①、②、③)」を栃木県農作物等病虫害雑草防除指針の参考資料に掲載中。<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/haishinfile/list/tochigi>

○農薬は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、正しく使いましょう。

○水稻の種子伝染性病害の発生を防止しましょう。

まもなく水稻の育苗の時期となります。種子消毒を適切に行い、使用する床土や育苗箱、育苗器などの育苗資材・器具もしっかり消毒することで、苗立枯病や種子伝染性病害の発生を防止しましょう。さらに近年、特に育苗期間中の高温が原因と思われる病害(もみ枯細菌病、苗立枯細菌病など)の発生が多くなっていますので、育苗ハウスなどの適正な温湿度管理にも留意しましょう。

1か月気象予報(予報期間2月20日から3月19日 2月18日気象庁発表)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率70%です。3~4週目は、高い確率50%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

項目	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	10%	20%	70%
降水量	20%	40%	40%
日照時間	40%	30%	30%

詳しくは農業環境指導センター(Tel 028-626-3086)までお問合せください。

病虫害情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部\(@tochigi_nousei\)](https://twitter.com/tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>)でもご覧になれます。

令和2(2020)年度 病虫害発生予報 第12号

令和3(2021)年3月19日
栃木県農業環境指導センター

気温の上昇に伴う病虫害の発生増加に注意しましょう。

予想期間 3月下旬～4月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 ・発生量：少ない
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は少ない(平年比10%：ほ場率、平年比13%：株率)。(－)
・向こう1か月の降水量、日照時間は平年並の見込み。(±)
- (3) 対 策 ・老化葉などを除去し、風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
・発病した果実、果梗等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
・予防を主体にベルコートフロアブル等を散布する。曇雨天時に防除する場合には、くん煙剤を使用する。
- (4) 備 考 ・[灰色かび病薬剤感受性結果①](#)、[②](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 いちご アブラムシ類

- (1) 発生予想 ・発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比82%：ほ場率、平年比46%：株率)。(±)
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は平年並の見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・発生が見られる場合は、ベネビアOD等を散布する。
・ほ場内外の雑草が増殖源となることが多いので、除草する。

3 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 ・発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比89%：ほ場率、平年比57%：株率)。(±)
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は平年並の見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・低密度のうちにマツチ乳剤[シキイロザシマ]等のIGR剤を散布する。
・被害が大きくなるおそれがある場合には、スピノエース顆粒水和剤等を散布する。本剤はカブリダニ等の天敵に影響があるので、影響日数を考慮して散布する。
- (4) 備 考 ・[防除のポイントNo.19](#)、[アザミウマ類感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターHPに掲載中。

4 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 ・発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比86%：ほ場率、平年比76%：株率)。(±)
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は平年並の見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・抵抗性の発達を抑制するため、気門封鎖剤や天敵製剤を積極的に活用する。
・天敵導入ほ場でハダニが多発生した場合は、天敵に影響の少ない薬剤を散布し、天敵の追加散布を行う。
・化学農薬を使用する場合はローテーション散布する。
・葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布すると効果的である。
- (4) 備 考 ・[ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 ・発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比90%：ほ場率、平年比43%：株率)。(±)
・向こう1か月の降水量、日照時間は平年並の見込み。(±)
- (3) 対 策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を用いた通風により、施設内の湿度低下に努める。
・発病葉、発病果や花卉は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。

- ・発生状況に応じてセイビアーフロアブル 20 等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備考 ・ [灰色かび病薬剤感受性検定結果①、②](#)を当センターHPに掲載中。

6 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想 ・発生量：多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量が多い（平年比 233%：ほ場率、平年比 146%：株率）。（+）
 ・向こう1か月の降水量、日照時間は平年並の見込み。（±）
- (3) 対策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。多湿時は循環扇や暖房機等を用いた通風により、施設内の湿度低下に努める。
 ・発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
 ・発生が見られたらファンタジスタ顆粒水和剤等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備考 ・ [葉かび病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

7 たまねぎ べと病

- (1) 発生予想 ・発生量：多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い（50%：ほ場率）。（+）
 ・向こう1か月の平均気温は高く、降水量は平年並の見込み。（+）
- (3) 対策 ・発病した株は、速やかに抜き取り、ほ場外で処分する。
 ・予防を主体に、ジマンダイセン水和剤等を散布する。
 ・発生が見られたらホライズンドライフロアブル等を散布する。
- (4) 備考 ・ [植物防疫ニュース No. 15](#)を当センターHPに掲載中。

8 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
いちご	うどんこ病	少	少	きゅうり	アザミウマ類	やや少	平年並
トマト	黄化葉巻病	やや少	やや少		コナジラミ類	多	多
	コナジラミ類	やや少	平年並	きく	ハダニ類	平年並	やや多
きゅうり	うどんこ病	やや多	やや多				

春の病害虫防除対策

○麦類赤かび病

出穂や開花状況をよく観察して、適期に赤かび病防除を行きましょう。

○いちご親株床

親株定植の準備を万全にし、親株に病害虫の発生がないかよく確認して定植しましょう。また、本ぼと親株床の管理作業を分け、本ぼからの病害虫の持ち込みを避けましょう。

○トマト コナジラミ類、キュウリ アザミウマ類

気温の上昇に伴い、施設内で越冬したコナジラミ類やアザミウマ類が急増するおそれがあります。特に、タバココナジラミはトマト黄化葉巻病を媒介し、ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病を媒介するため、ほ場内をよく観察し、早期防除を心がけましょう。病害虫防除対策のポイント ([No. 10 キュウリ黄化えそ病](#)、[No. 22 トマト黄化葉巻病](#))を当センターHPに掲載中。

○なし黒星病

一次伝染時期となるりん片脱落期から開花後は最重要防除期です。果そう基部病斑（芽基部病斑）の摘み取りを徹底し、2分咲きから落花直後に治療効果のあるDMI剤を散布しましょう。[ナシ黒星病菌の簡易薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

○病害虫防除にあたっては、RACコードを参考に、同一系統の薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

○花粉媒介昆虫（ミツバチ、マルハナバチ）や天敵に対する影響日数を目安に薬剤を選択しましょう。

ミツバチ・天敵等に対する農薬の影響の目安①、②、③を栃木県農作物等病害虫雑草防除指針 参考資料に掲載中。<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/haishinfile/list/tochigi>

1か月気象予報（予報期間3月20日から4月19日 3月18日気象庁発表）

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率70%です。3

～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	10%	20%	70%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	30%	40%	30%

詳しくは農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問合せください。

病虫害情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部 \(@tochigi_nousei\)](https://twitter.com/tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。

令和3(2021)年度 病害虫発生予報 第1号

令和3(2021)年4月23日
栃木県農業環境指導センター

外気温急変時のハウス内の温度に注意して、病害虫の発生を抑えましょう！

予想期間4月下旬～5月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや少ない(平年比55%：ほ場率、平年比49%：株率)。(－)
・ 向こう1か月の気温は高く、日照時間は平年並～多い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・ 気門封鎖剤を活用するとともに、化学農薬のローテーション散布を行うことで抵抗性の発達を抑制する。
・ 気門封鎖剤は、5日程度の間隔をおき複数回散布する。
・ 葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中

2 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並(平年比72%：ほ場率、平年比94%：花率)。(±)
・ 向こう1か月の気温は高く、日照時間は平年並～多い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 花を良く観察して、被害が大きくなる恐れがある場合はディアナSC等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [アザミウマ類薬剤感受性検定結果](#)、[続報](#)を当センターHPに掲載中。

3 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量が多い(平年比262%：ほ場率、平年比290%：株率)。(＋)
・ 向こう1か月の降水量は少ない～平年並、日照時間は平年並～多い見込み。(－～±)
- (3) 対 策 ・ 施設内が多湿にならないよう換気に努めるとともに、かん水量に注意する。また、循環扇や暖房機等を用いて通風を図る。
・ 発病葉は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
・ 発生が見られたらアフエットフロアブル等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・ [葉かび病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 きゅうり ベと病

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い(平年比163%：ほ場率、平年比292%：株率)。(＋)
・ 向こう1か月の降水量は少ない～平年並、日照時間は平年並～多い見込み。(－～±)
- (3) 対 策 ・ 施設内が多湿にならないよう換気に努めるとともに、かん水量に注意する。
・ 草勢低下は発生を助長させるので、適正な肥培管理を行う。
・ 予防を主体に銅剤やダコニール1000等を散布する。発病が見られるほ場では、治療効果のあるリドミルゴールドMZ等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [キュウリベと病菌薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 たまねぎ ベと病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並(平年比80%：ほ場率、平年比60%：株率)。(±)
・ 向こう1か月の降水量は少ない～平年並、日照時間は平年並～多い見込み。(－～±)
- (3) 対 策 ・ 排水対策を行う。
・ ジマンダイセン水和剤、ザンプロDMフロアブル等を散布する。
・ 曇雨天が続くと予想される場合は、降雨前に薬剤を散布する。
- (4) 備 考 ・ 気温15℃前後で雨が多いと発生が多くなりやすい。

6 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
いちご	灰色かび病	少	少	きゅうり	うどんこ病	平年並	平年並
	うどんこ病	やや少	やや少		アザミウマ類	少	やや少
	アブラムシ類	平年並	やや多	たまねぎ	アザミウマ類	やや多	多
トマト	灰色かび病	平年並	平年並	きく	ハダニ類	平年並	やや多

春の病害虫防除対策

○麦類赤かび病

生育が平年より早く進んでいるので出穂や開花状況をよく観察して、適期に本病防除を行いましょう。

[植物防疫ニュース No.1](#) を当センターHP に掲載中。

○いちご親株床

親株定植の準備を万全にし、親株に病害虫の発生がないかよく確認して定植しましょう。また、本ぼと親株床の管理作業を分け、本ぼからの病害虫の持ち込みを避けましょう。

○きゅうり・きく アザミウマ類

気温の上昇に伴い、施設内で越冬したアザミウマ類が増加するおそれがあります。特に、ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病を媒介し、ミカンキイロアザミウマはキク茎えそ病、キクえそ病を媒介します。ほ場内をよく観察し、早期防除を心がけましょう。

○なし 黒星病

凍霜害が発生しており、着果量が減る傾向にあります。果そう基部病斑(芽基部病斑)の摘み取りを徹底し、治療効果があるDMI 剤を散布しましょう。また、開花期から展葉初期に降雨が多く、開花から2週間以内に黒星病の発生が散見される場合は、多発の危険がありますので注意しましょう。昨年多発したほ場は胞子の飛散量が多いため特に注意が必要です。[ナシ黒星病菌の簡易薬剤感受性検定結果](#) を当センターHP に掲載中。

○サツマイモ 基腐病

本病は栃木県では未発生ですが、全国9県で発生が確認されています。本病の発生を防ぐため、発生地域からの種イモや苗を持ち込まないこと、苗や種イモは健全なものを使用すること、早期発見等により未然に防止すること等が重要です。[サツマイモ基腐病に注意!](#) を当センターHP に掲載中。

ORAC コードを参考に、同一系統の薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

○花粉媒介昆虫(ミツバチ、マルハナバチ)や天敵に対する影響日数を目安に薬剤を選択しましょう。

ミツバチ・天敵等に対する農薬の影響の目安①、②、③を栃木県農作物等病害虫雑草防除指針 参考資料に掲載中。<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/haishinfile/list/tochigi>

○農薬は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、正しく使いましょう

○4月1日から6月30日の3か月間は「春の栃木県農作業安全確認運動」実施期間です。事故防止のため乗車型トラクターを運転する時にはシートベルトを着用しましょう!

1か月気象予報(予報期間4月22日から5月23日 4月22日気象庁発表)

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

項目	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	30%	30%	40%
降水量	40%	40%	20%
日照時間	20%	40%	40%

詳しくは農業環境指導センター(Tel 028-626-3086)までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部\(@tochigi_nousei\)](#)」、農業環境指導センターホームページ(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>)でもご覧になれます。

令和3(2021)年度 病害虫発生予報 第2号

令和3(2021)年5月21日
栃木県農業環境指導センター

まん延防止のため、栽培終了時まで確実な防除を行い、 次作への病害虫発生を防ぎましょう！

予想期間 5月下旬～6月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稲 縞葉枯病 (ヒメトビウンカ媒介)

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや少ない**
- (2) 根 拠 ・ 昨年10月の再生稲調査での本病の発生はやや少(平年比34%：株率)。(－)
・ 昨年11月のウンカ類の越冬前幼虫の発生量はやや少。(－) ウイルスの保毒虫率は平年並(県平均5.0%)。(±)
- (3) 対 策 ・ 昨年発生が多かった地域では、本田期防除を実施する。
- (4) 備 考 ・ 県内の保毒虫率は、県南部で高い(防除が必要とされる保毒虫率10%を超える)地点が確認されており、引き続き注意する。
・ [令和2\(2020\)年度植物防疫ニュースNo.14](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 麦類 赤かび病

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **平年並**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は少ない(平年比0%：ほ場率、平年比0%：株率)。(－)
・ 向こう1か月の降水量は平年並～多い、日照時間は少ない見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 開花・出穂期での発生がない場合でも、不稔粒発生や登熟期連続降雨などによって発生することがある。今年は不稔粒が散見されているので、天候やほ場をよく確認し、必要に応じて追加防除を行う。
- (4) 備 考 ・ [令和3\(2021\)年度植物防疫ニュース No. 1](#)を当センターHPに掲載中。

3 いちご(親株) ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 向こう1か月の平均気温は平年並～高い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 本ばで薬剤抵抗性を発達させたハダニ類を親株に持ち込まないために、本ば作業後に親株の管理作業を行わない。
・ 雑草はハダニ類の発生源となるため、除草を徹底する。
・ 気門封鎖剤や天敵製剤を活用することで、作全体の化学農薬の散布回数を減らし、抵抗性の発達を抑制する。
・ 気門封鎖剤は5日程度の間隔をおき、複数回散布する。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

4 きゅうり べと病

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い(平年比145%：ほ場率、平年比75%：株率)。(＋)
・ 向こう1か月の降水量は平年並～多い、日照時間は少ない見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 株元をマルチ等で覆って、雨滴の跳ね上がりを防止し、整枝や摘葉等を適切に行い、風通しを良くする。
・ ハウス栽培では換気を行い、過湿防止につとめる。
・ 発病葉や被害残渣はほ場外に持ち出し適切に処分する。
・ 草勢低下は発生を助長させるので、適正な肥培管理を行う。
・ ほ場をよく観察し、発生の少ないうちに薬剤散布を行う。
- (4) 備 考 ・ [キュウリべと病菌薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 たまねぎ べと病

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生は平年並(平年比67%：ほ場率、平年比22%：株率)。(±)
・ 向こう1か月の降水量は平年並～多い、日照時間は少ない見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 排水対策を行う。
・ プロポーズ顆粒水和剤、ホライズンドライフロアブル等を散布する。
・ 曇雨天が続くと予想される場合は、降雨前に薬剤を散布する。

(4) 備 考 ・ [令和2\(2020\)年度植物防疫ニュース No. 15](#) を当センターHP に掲載中。

6 果樹 果樹カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠 ・ 現在のフェロモントラップへの誘殺数は少ない。(一)
・ 昨年のスギ・ヒノキの球果量は少ない。(一)
- (3) 対 策 ・ 夜温が下がらない蒸し暑い日の日没時に飛来が多い。こまめに園内を観察し、飛来が認められたら防除する。
・ 4mm 目合以下の多目的防災網で園全体を被覆し、被害を防止する。
- (4) 備 考 ・ 未発生園での過度な防除は天敵相を破壊し、他の害虫種の多発に繋がるため注意する。
・ 山林に隣接したほ場や、過去に被害が大きかったほ場では特に注意する。

7 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
トマト	灰色かび病	やや少	平年並	きく	白さび病	平年並	やや多
	コナジラミ類	平年並	やや多		ハダニ類	やや少	平年並
きゅうり	うどんこ病	平年並	やや多	野菜・花き	アザミウマ類	やや多 ～多	多
	コナジラミ類	多	多				
なし	黒星病	少	やや少				

○施設栽培の病害虫

- ・ トマト、きゅうり、いちご等の施設栽培では、栽培終了時にハウスの密閉蒸し込みを行うなど、施設内の害虫を野外へ「出さない」対策を徹底しましょう。特に、タバココナジラミはトマト黄化葉巻病(TYLCV)を媒介し、ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病(MYSV)を媒介するため、注意が必要です。
- ・ 栽培末期の病害虫は、各種薬剤に抵抗性を発達させている可能性があります。葉かき後の葉や残渣に付着した病害虫の拡散防止のため、ほ場内外に放置せず、ビニル袋などで密封し枯死させてから処分しましょう。

○ウメ・モモ・スモモ・サクラ クビアカツヤカミキリ（特定外来生物）

- ・ 6月になるとクビアカツヤカミキリの成虫や、幼虫が出すフラス（木くず）の発生が盛んになります。県内での発生地域は拡大傾向にあるので、これまで発生が確認されていない園地においても見回りを行いましょう。発見時には農業環境指導センターまで御連絡ください。
- ・ クビアカツヤカミキリ注意喚起チラシ及び[令和3\(2021\)年度植物防疫ニュース No. 2](#)を当センターHPに掲載中。

○飼料用トウモロコシ等 ツマジロクサヨトウ

- ・ ツマジロクサヨトウは、昨年初めて県内での発生が確認された広食性のヤガ科害虫です。本虫の防除には早期発見が重要であることから、日頃からほ場の見回りを行いましょう。
- ・ ツマジロクサヨトウに注意しましょう及び[令和2\(2020\)年度病害虫発生予察特殊報第1号](#)を当センターHPに掲載中。

○ 県では、農業による事故等の発生防止を図るため、6月から8月の3か月間を「農業危害防止運動期間」とし、農業の適正使用等について啓発活動を行います。

○ 農業は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、正しく使いましょう。

○ 花粉媒介昆虫(ミツバチ、マルハナバチ)や天敵に対する影響日数を目安に薬剤を選択しましょう。ミツバチ・天敵等に対する農薬の影響の目安①、②、③を栃木県農作物等病害虫雑草防除指針 参考資料に掲載中。<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/haishinfile/list/tochigi>

○ 4月1日から6月30日の3か月間は「春の栃木県農作業安全確認運動」実施期間です。事故防止のため乗車型トラクターを運転する時にはシートベルトを着用しましょう！

1か月気象予報（予報期間5月22日から6月21日 5月20日気象庁発表）

期間の前半は、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、少ない確率50%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	10%	40%	40%
降水量	20%	40%	40%
日照時間	50%	30%	20%

詳しくは農業環境指導センター（TEL 028-626-3086）までお問合せください。

病虫害情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部\(@tochigi_nousei\)](#)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。

令和3(2021)年度 病害虫発生予報 第3号

令和3(2021)年6月18日
栃木県農業環境指導センター

天候の変化による病害虫の発生増加に注意しましょう。

予想期間6月下旬～7月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稲 いもち病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並～多い見込み。(±)
- (3) 対 策 ・ 葉いもちの初発時期6月第4半旬～6半旬にほ場をよく見回り、早期発見に努める。
・ 発生が見られる場合は、ブラシフロアブル等予防・治療効果のある薬剤を散布する。
- (4) 備 考 ・ [BLASTAM\(いもち病発生時期予測システム\)](#)の情報、[いもち病薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 水稲 縞葉枯病(ヒメトビウンカ媒介)

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**やや少ない**
- (2) 根 拠 ・ ヒメトビウンカ第一世代幼虫の生息密度は 少ない(平年比17%)。(－)
・ 本虫のウイルス保毒虫率はやや少ない(県平均3.6% 平年比57%)。(－)
・ 向こう1か月の平均気温は、平年並の見込み。(±)
- (3) 対 策 ・ ウイルス保毒虫率が高い地域や、箱施用剤を使用しなかった場合は、本田期防除を行う。
- (4) 備 考 ・ 県内の保毒虫率は、県央、県南部で高い地点が確認されており、引き続き注意する。
[植物防疫ニュース\(速報No. 3\)](#)を当センターHPに掲載中。

3 いちご(親株床・育苗) 炭疽病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**やや少ない**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は少ない(平年比0%：ほ場率)。(－)
向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並～多い、日照時間は少ない～平年並の見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 水滴の飛散等で伝染するので、頭上かん水は避け、点滴チューブを用いるなど水の跳ね返りのない方法でかん水を行う。
・ 発病してからの防除は困難なので、予防を主にベルコートフロアブル等を散布する。また、発病株は見つけ次第取り除き、ほ場外で処分し、速やかに治療効果のあるサンリット水和剤等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [病害虫防除対策のポイント\(イチゴ炭疽病\)](#)、[薬剤感受性検定結果\(QoI 剤\)](#)を当センターHPに掲載中。

4 野菜類・花き類 アザミウマ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 6月第1半旬までの青色粘着板への成虫の誘殺数は平年並。(±)
・ きゅうりでの発生量はやや少なく、なすでは平年並、きくではやや少ない。(－～±)
・ 向こう1か月の平均気温は平年並の見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、ほ場内外を除草する。
施設栽培では開口部に防虫ネットを張り、アザミウマ類の侵入を防ぐ。
・ 発生初期から薬剤を散布する。薬剤感受性の低下を防ぐため、同系統薬剤の連続散布は避ける。
- (4) 備 考 ・ アザミウマ類はウイルス病の病原ウイルスを媒介する。
・ [アザミウマ類剤感受性検定結果、検定結果\(続報\)](#)を当センターHPに掲載中。

5 なし 黒星病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや少ない(平年比22%：ほ場率)。(±)
・ 向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並～多い見込み(±～＋)
- (3) 対 策 ・ 発病した葉や果実は伝染源となるため、摘み取ってほ場外で処分する。
・ 病害が広がらないように、定期的に防除を行う。薬剤はかけむらがないように、十分な量を丁寧に散布する。
- (4) 備 考 ・ [ナン黒星病菌の簡易薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

6 果樹 果樹カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠 ・ 現在のフェロモントラップへの誘殺数は少ない。(－)
 ・ 本年はスギ・ヒノキの球果量が少ないため、餌が不足し、7月以降の山林からの飛来時期が早まり、飛来量が増えるおそれがある。(＋)
- (3) 対 策 ・ こまめにほ場を観察し、飛来が確認されたら防除する。
 ・ 4mm 目合以下の多目的防災網を展張し、隙間がないように注意する。
- (4) 備 考 ・ 山林に隣接したほ場や、過去に被害が大きかったほ場では特に注意する。

7 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現 況	発生予想	作物名	病害虫名	現 況	発生予想
いちご	うどんこ病	少	やや少	野菜類	ハスモンヨトウ	平年並	平年並
いちご	ハダニ類	やや少	平年並	なし	ナシヒメシンクイ	平年並	平年並
トマト	コナジラミ類	平年並	平年並	ぶどう	べと病	少	やや少
きゅうり	コナジラミ類	やや多	やや多	きく	白さび病	平年並	平年並
野菜類	アブラムシ類	平年並	平年並				

○ほ場内外の除草は害虫防除の基本です！

・ 周辺の雑草だけではなく水田内の雑草（ノビエ、イヌホタルイ等）も、斑点米カメムシ類の誘引・発生源となります。また、野菜類や花き類でも、ほ場内外の雑草はハダニ類やアザミウマ類、アブラムシ類の温床となります。適切な雑草対策で、害虫類の生息しにくい環境を作りましょう。

○うめ・もも・すもも・さくら クビアカツヤカミキリ（特定外来生物）

・ 成虫や、幼虫が出すフラス（木くず）を発見したら農業環境指導センターまで御連絡ください。
 ・ [クビアカツヤカミキリ注意喚起チラシ](#)及び[令和3\(2021\)年度植物防疫ニュース No. 2](#)を当センターHPに掲載中です。

○飼料用トウモロコシ等 ツマジロクサヨトウ

・ 昨年初めて県内での発生が確認された広食性のヤガ科害虫です。発生が見られる場合は、早期にデルフィン顆粒水和剤、パダン SG 水溶剤等の薬剤を散布しましょう。
 ・ [令和2\(2020\)年度病害虫発生予察特殊報第1号](#)を当センターHPに掲載中です。

○水稻 スクミリンゴガイ

・ 現在、足利市・野木町の排水路等で生息が確認されています。今後の気象条件によっては、生息地域が拡大するおそれがあるので注意が必要です。
 ・ [スクミリンゴガイに注意しましょう](#)を当センターHPに掲載中です。

○かんしょ サツマイモ基腐病

・ 本病は栃木県では未発生ですが、全国 10 県（6月 14 日 群馬県特殊報発表）で発生が確認されています。早期発見により、被害を未然に防止することが重要です。
 ・ [サツマイモ基腐病に注意！](#)を当センターHPに掲載中です。

○ 県では、農業による事故等の発生防止を図るため、6月から8月の3か月間を「農業危害防止運動期間」とし、「[農業ラベルの読み上げ運動](#)」を実施中です。農業は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、正しく使いましょう。

1か月気象予報（予報期間6月19日から7月18日 6月17日気象庁発表）

平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。向こう1か月の気温はほぼ平年並です。向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

項 目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	3 0 %	4 0 %	3 0 %
降 水 量	2 0 %	4 0 %	4 0 %
日照時間	4 0 %	4 0 %	2 0 %

詳しくは農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部\(@tochigi_nousei\)](#)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。

令和3(2021)年度 病虫害発生予報 第4号

令和3(2021)年7月16日
栃木県農業環境指導センター

気温上昇による害虫の発生増加に注意しましょう！

予想期間 7月下旬～8月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稻 いもち病

- (1) 発生予想 ・発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い（平年比171%：ほ場率、平年比721%：株率）。(+)
・向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並～多く、日照時間は少ない見込み。(+)
- (3) 対 策 ・ほ場の発生状況を良く観察し、発病が見られた場合、早急にブラシフロアブル等の予防・治療効果のある薬剤を散布する。
- (4) 備 考 ・上位葉に葉いもちが多いと穂いもちの発生も多くなるため、出穂前防除を徹底する。
・[BLASTAM\(いもち病発生時期予測システム\)](#)の情報、[イネいもち病薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 水稻 稲こうじ病

- (1) 発生予想 ・発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・昨年8月下旬の発生量はやや多かった（平年比119%：ほ場率、平年比266%：株率）。(+)
・向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並～多く、日照時間は少ない見込み。(±)
- (3) 対 策 ・銅剤（出穂期20～10日前に散布）や、モンガリット粒剤（出穂期21～14日前に散布）等により、適期に防除を行う。この期間以外の散布は効果が落ちることに注意する。
・土壌中の菌密度が高いと発生しやすくなるため、前年度や前々年度に発生が多かったほ場は特に注意する。
- (4) 備 考 ・[植物防疫ニュース\(速報No. 4\)](#)を当センターHPに掲載中。

3 水稻 紋枯病

- (1) 発生予想 ・発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並（平年比75%：ほ場率、平年比51%：株率）。(±)
・向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並～多く、日照時間は少ない見込み。(±)
- (3) 対 策 ・発生が見られた場合には、穂ばらみ期から出穂期までの間にモンガリット粒剤、モンカ
ットフロアブル等を散布する。発生が激しい場合は2回目を散布する。

4 水稻 斑点米カメムシ類

- (1) 発生予想 ・発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・6月下旬の雑草地におけるすくい取り調査での発生量はやや少ない(平年比47%：成幼虫数)。(－～±)
・向こう1か月の気温は高い見込み。(+)
- (3) 対 策 ・穂ぞろい期に斑点米カメムシ類が水田内で見られる場合は、乳熟初期（出穂期7～10日後）までにMR.ジョーカーEW、エクシードフロアブル等を散布する。
・防除後も斑点米カメムシ類が見られる場合は、7～10日間隔で1～2回追加散布する。
- (4) 備 考 ・[植物防疫ニュース\(速報No. 5\)](#)を当センターHPに掲載中。

5 大豆 吸実性カメムシ類

- (1) 発生予想 ・発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・6月第6半旬までのフェロモントラップへのホソヘリカメムシ誘殺数は平年並。(±)
・向こう1か月の気温は高い見込み。(+)
- (3) 対 策 ・開花期の15日後から子実肥大後期（9月下旬）までにトレボン乳剤、スミチオン乳剤等を10～14日間隔で散布する。カメムシ類の発生が多い場合は、散布間隔を短く、回数を多くする。

6 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 ・発生量：**やや多**
- (2) 根 拠 ・昨年8月上旬の発生量はやや多かった（平年比 168%：ほ場率、平年比 267%：株率）。
（+）
・向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並～多く、日照時間は少ない見込み。（±～+）
- (3) 対 策 ・雨よけ栽培を基本とし、点滴チューブを用いるなど、できるだけ水の跳ね返りのない方法でかん水を行う。
・本ほへの持ち込みを防ぐため、育苗での防除を徹底する。予防を主体に、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
・発病株や感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分する。
・発病株周辺の株は、発病が認められなくても潜在感染している可能性があるため、注意する。
- (4) 備 考 ・[炭疽病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

7 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 ・発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない（平年比 22%：ほ場率、平年比 7%：株率）。（-）
・向こう1か月の平均気温は高い見込み。（+）
- (3) 対 策 ・本ほへの持ち込みを防ぐため、育苗段階での防除を徹底する。
・気門封鎖剤や天敵製剤を活用するとともに、異なる系統の薬剤をローテーション散布することで抵抗性の発達を抑制する。
- (4) 備 考 ・[ハダニ類薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

8 りんご 斑点落葉病・褐斑病

- (1) 発生予想 ・発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量が多い（平年比 439%、833%：斑点落葉病、褐斑病ほ場率）。（+）
・向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並～多く、日照時間は少ない見込み。（±）
- (3) 対 策 ・定期的に予防散布を行い、耐性菌発生防止のため異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
・発生が確認されたらファンタジスタ顆粒水和剤、パレード 15フロアブル等を散布する。
- (4) 備 考 ・[リンゴ褐斑病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

9 なし シンクイムシ類

- (1) 発生予想 ・発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・6月第6半月のフェロモントラップへのナシヒメシンクイ成虫の誘殺数は平年並。（±）
・向こう1か月の気温は高い見込み。（+）
- (3) 対 策 ・ほ場内をよく観察し、発生及び食害状況に応じてノーモルト乳剤、エクシレル SE 等により適宜防除を行う。
・果実や新梢に食害が見られた場合は速やかに摘果またはせん除を行い、ほ場外に持ち出して適切に処分する。
- (4) 備 考 ・[ナシヒメシンクイの誘殺数グラフ](#)を当センターHPに掲載中。

10 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
水稻	縞葉枯病	平年並	平年並	きゅうり	べと病	平年並	平年並
いちご	うどんこ病	平年並	平年並	なし	黒星病	平年並	平年並
トマト	黄化葉巻病	多	多	果樹	果樹カメムシ類	少	平年並
	コナジラミ類	平年並	やや多	きく	白さび病	やや少	やや少
ねぎ	黒斑病・葉枯病	平年並	平年並				

○ほ場内外の除草は害虫防除の基本です！

- ・水田周辺の雑草だけでなく、水田内の雑草（ノビエ、イヌホタルイ等）も斑点米カメムシ類の誘引・発生源となります。また、野菜類や花き類でも、ほ場内外の雑草はハダニ類やアザミウマ類、アブラムシ類の温床となります。適切な雑草対策で、害虫類が生育しにくい環境を作りましょう。

○うめ・もも・すもも・さくら クビアカツヤカミキリ（特定外来生物）

- ・幼虫が出すフラス（木くず）や成虫を発見したら農業環境指導センターまで御連絡ください。
- ・[クビアカツヤカミキリ注意喚起チラシ](#)、[植物防疫ニュース（No. 2）](#)を当センターHPに掲載中です。

○飼料用トウモロコシ等 ツマジロクサヨトウ

- ・昨年、栃木県内で初発生が確認された広食性のヤガ科害虫です。発生が見られた場合は、早期にデルフィン顆粒水和剤、パダンSG水溶剤を散布しましょう。
- ・[令和2\(2020\)年度病害虫発生予察特殊報第1号](#)を当センターHPに掲載中です。

○かんしょ サツマイモ基腐病

- ・本病は栃木県内での発生は確認されていませんが、令和3(2021)年7月現在、全国13都県（7月15日千葉県特殊報発表）で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。健全な種苗を導入すること及び発病株の早期発見により被害の拡大を未然に防止することが重要です。
- ・[サツマイモ基腐病に注意！](#)を当センターHPに掲載中です。

○栃木県では、農業による事故等の発生防止を図るため、6月から8月の3か月間を「農業危害防止運動期間」とし、「[農業ラベルの読み上げ運動](#)」を実施中です。農業は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、正しく使用しましょう。

1か月気象予報（予報期間7月17日から8月16日 7月15日気象庁発表）

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。週別の気温は、1週目は平年並または高い確率ともに40%、2週目は平年並の確率50%で、3～4週目は高い確率40%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	30%	30%	40%
降水量	20%	40%	40%
日照時間	40%	30%	30%

詳しくは農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部\(@tochigi_nousei\)](#)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。

天候の変化に留意し、病害虫の発生動向に備えましょう！

予想期間8月下旬～9月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稻(普通植栽培) いもち病(穂いもち)

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・現在の葉いもち(上位葉)の発生量が多い(平年比369%：ほ場率、平年比282%：株率)。(±)
・向こう1か月の平均気温は高く、降水量は平年並の見込み。(－～±)
- (3) 対 策 ・ほ場の発生状況を良く観察し、発病が見られた場合、穂いもちに進展しないよう早急にブラシフロアブル等の予防・治療効果のある薬剤を散布する。
- (4) 備 考 ・[植物防疫ニュース\(速報No.6\)](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 大豆 ベと病

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比85%：ほ場率、平年比81%：株率)。(±)
・品種「里のほほえみ」はべと病が発生しやすい。(＋)
・向こう1か月の平均気温は高く、降水量は平年並の見込み。(－～±)
- (3) 対 策 ・開花10日前から子実肥大期にザンプロDMフロアブル、ベトファイター顆粒水和剤等を散布する。
・発生が拡大する場合は子実肥大中期(開花40日後頃)まで追加防除する。
- (4) 備 考 ・[植物防疫ニュース\(速報No.10\)](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

3 大豆 吸実性カメムシ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比52%：ほ場率、平年比50%：株率)。(－)
・向こう1か月の平均気温は高い見込み。(＋)
・8月第1半旬までのフェロモントラップによるホソヘリカメムシ総誘殺数は平年と比べてやや多い。(＋)
- (3) 対 策 ・開花期の15日後頃から、ダントツフロアブル、トレボン乳剤等を10～14日間隔で散布する。なお、子実肥大中期(開花40日後頃)の吸汁害は、減収および品質低下が大きいので、発生状況を確認し、9月も継続して防除を行う。

4 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比47%：ほ場率、平年比50%：株率)。(－)
・向こう1か月の平均気温は高い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・植物体の濡れ時間が長くと感染・発病が助長されるので、かん水は午前中に行い、夕方には地上部が乾いた状態になるよう、かん水の時間や量を調節する。また、水はねで伝染するので丁寧なかん水を心がける。
・症状が出てからの防除は困難なので、予防を主体に異なる系統の薬剤をローテーション散布する。苗による本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗での防除を徹底する。
・発病株や感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分する。
・発病株周辺の株は、発病が認められなくても潜在感染している可能性があるため、注意する。
・定植後も潜在感染株が発病・枯死することがあるので、しばらく注意して観察する。
- (4) 備 考 ・[植物防疫ニュース\(速報No.9\)](#)、[炭疽病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比29%：ほ場率、平年比8%：株率)。(－)
・向こう1か月の平均気温は高い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・コロマイト水和剤等の薬剤散布や農薬炭酸ガス処理により、定植前に徹底防除を行い、本ぼへの持ち込みを防ぐ。化学農薬はローテーション散布を行うことで抵抗性の発達を抑制する。

- ・育苗期後半～定植当日にモベントフロアブルをかん注する。なお、天敵を導入するほ場では、天敵への影響日数（45日）に注意して使用する。
 - ・雑草はハダニ類の発生源となるため、ほ場内外を除草する。
- (4) 備考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

6 いちご アブラムシ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並（平年比72%：ほ場率、平年比37%：株率）。（±）
・向こう1か月の平均気温は高い見込み。（±）
- (3) 対策 ・苗による本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗での防除を徹底する。発生が見られる場合は、モスピラン顆粒水和剤等を散布する。
・定植時に粒剤やかん注剤を施用する。なお、天敵を導入するほ場では、使用する薬剤の天敵への影響日数に注意して使用する。
・雑草はアブラムシ類の発生源となるため、ほ場内外を除草する。

7 りんご 斑点落葉病・褐斑病

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・斑点落葉病・褐斑病ともに現在の発生量は多い
（斑点落葉病・平年比389%：ほ場率、平年比675%：葉率）。（+）
（褐斑病・平年比400%：ほ場率、平年比600%：葉率）。（+）
・向こう1か月の平均気温は高く、降水量は平年並の見込み。（±～+）
- (3) 対策 ・定期的に予防散布を行い、耐性菌発生防止のため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
・ほ場内を良く観察し、発生状況に応じて薬剤散布を行う。
- (4) 備考 ・ [植物防疫ニュース\(速報 No. 8\)](#)、[りんご褐斑病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

8 大豆・野菜類・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・8月第1半旬までのフェロモントラップへの成虫の誘殺数及び発生時期は平年並。（±）
・向こう1か月の平均気温は高い見込み。（+）
- (3) 対策 ・施設栽培では開口部に防虫ネット等を張り、侵入を防ぐ。
・定期的にはほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
・幼虫の齢期が進むと被害が大きくなる上に、薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤散布を行う。

9 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
水稻	紋枯病	平年並	やや多	きゅうり	べと病	多	多
大豆	紫斑病	—	平年並	果樹類	褐斑病	やや多	やや多
	アズビヒムシ	平年並	やや多		カメムシ類	少	やや少
大豆・野菜類	タバコガ類	やや少	平年並	きく	ハダニ類	平年並	やや多
野菜類	うどんこ病	平年並	平年並				

○トマト黄化葉巻病（TYL CV）の防除対策

TYL CVはタバココナジラミによって媒介されます。夏秋トマトで黄化葉巻病が発生したほ場では、施設の蒸し込みを行うなど、残さに寄生している媒介虫を施設外に「出さない」対策を徹底しましょう。また、収穫後の残さは適切に処分しましょう。詳しくは、[病害虫防除対策のポイント No. 22\(トマト黄化葉巻病\)](#)を当センターHPに掲載中。

○かんしょ サツマイモ基腐病

- ・本病は栃木県内での発生は確認されていませんが、令和3(2021)年8月現在、全国17都県で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。健全な種苗を導入すること及び発病株の早期発見により被害の拡大を未然に防止することが重要です。
- ・[サツマイモ基腐病に注意!](#)を当センターHPに掲載中です。

○うめ・もも・すもも・さくら クビアカツヤカミキリ（特定外来生物）

- ・幼虫が出すフラス（木くず）や成虫を発見したら農業環境指導センターまで御連絡ください。
- ・[クビアカツヤカミキリ注意喚起チラシ](#)、[植物防疫ニュース \(No. 2\)](#)を当センターHPに掲載中です。

○飼料用トウモロコシ等 ツマジロクサヨトウ

- ・昨年、栃木県内で初発生が確認された広食性のヤガ科害虫です。発生初期にB T水和剤（デルフィン顆粒水和剤、チューレックス顆粒水和剤、ジャックポット顆粒水和剤）、カルタップ水溶剤（パダンS G水溶剤）を散布しましょう。
- ・[令和2\(2020\)年度病害虫発生予察特殊報第1号](#)を当センターHPに掲載中です。

○栃木県では、農業による事故等の発生防止を図るため、6月から8月の3か月間を「農業危害防止運動期間」とし、「[農業ラベルの読み上げ運動](#)」を実施中です。農業は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、正しく使用しましょう。

1か月気象予報（予報期間8月21日から9月20日 8月19日気象庁発表）

天気は数日の周期で変わるでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並の確率40%です。日照時間は少ない確率40%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	20%	30%	50%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	40%	30%	30%

詳しくは農業環境指導センター（TEL 028-626-3086）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部\(@tochigi_nousei\)](#)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。

令和3(2021)年度 病害虫発生予報 第6号

令和3(2021)年9月17日
栃木県農業環境指導センター

秋冬作物の生育初期の病害虫発生に注意しましょう！

予想期間 9月下旬～10月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生は平年並（平年比 131%：ほ場率、平年比 150%：株率）。(±)
・ 向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は平年並～多い見込み。(+)
- (3) 対 策 ・ 発病株や感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分する。
・ 水滴の飛散等によって伝染するので、できるだけ水の跳ね返りのないかん水を行う。
また、かん水はできるだけ晴天日の午前中に行い、曇雨天日や夕方のかん水を控える。
・ 症状が出てからの防除は困難なので、予防を主体にセイビーフロアブル20等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [植物防疫ニュース\(速報No.9\)](#)、[炭疽病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量： **平年並**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並（平年比 68%：ほ場率、平年比 44%：株率）。(±)
・ 向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は平年並～多い見込み。(+)
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・ 化学農薬に対する感受性低下が著しいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しにくい気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。
・ 天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいので、天敵導入前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

3 トマト 黄化葉巻病 (TYLCV)

- (1) 発生予想 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 近年の発生量はやや多い。(+)
・ 向こう1か月の平均気温は高い見込み。(+)
- (3) 対 策 ・ ウイルスを媒介するタバココナジラミの侵入を防ぐため、ハウスの開口部（出入口、側窓、天窗）に0.4mm以下のネットを張り、特に出入口は2重にする。
・ 黄色粘着板の設置による媒介虫の捕殺やコナジラミが見られた時はコルト顆粒水和剤等を散布する。
・ 発病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ビニール袋などで密封し枯死させてから処分する。
・ 耐病性品種も本病に感染すると伝染源となるため、感受性品種と同様に適正な防除をする。
- (4) 備 考 ・ [防除のポイントNo.22](#)、[タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

4 きゅうり コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並（平年比 93%：ほ場率、平年比 70%：株率）。(±)
・ 向こう1か月の平均気温は高い見込み。(+)
- (3) 対 策 ・ 密度が増加すると防除が困難になるので、ほ場内に黄色粘着板を設置する等、早期発見・早期防除を行う。
・ 薬剤感受性の低下を避けるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
施設内外の除草を徹底し、ハウスの開口部に0.4mm目合以下のネットを張るなど、耕種的防除を徹底する。
・ 栽培終了後は施設を密閉し高温にしてコナジラミ類を死滅させ、施設外への本虫の拡散を防ぐ。
- (4) 備 考 ・ タバココナジラミは退緑黄化病(CCYV)を媒介する。

5 ねぎ 黒斑病・葉枯病

- (1) 発生予想 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い（平年比 106%：ほ場率、平年比 141%：株率）。(+)

- ・ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並みの見込み。(一～土)
- (3) 対策
 - ・ 発生初期の防除に重点を置く。多湿条件で発生しやすいため、秋雨期や曇雨天が続く場合は発生に注意して防除を行う。
 - ・ 肥料不足や過多は病害が発生しやすいため、適正な肥培管理を実施する。
 - ・ 被害葉や被害株は、ほ場外に持ち出し処分する。

6 野菜類(いちご・なす・キャベツ・レタス等)・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠
 - ・ 9月第1半旬までのフェロモントラップによる誘殺数は平年並。(±)
 - ・ 向こう1か月の平均気温は高い見込み。(＋)
- (3) 対策
 - ・ 定期的にほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
 - ・ 幼虫の齢期が進むと被害が大きくなる上に、薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。

7 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
きゅうり	べと病	多	多	キャベツ・レタス	タバコガ類	—	平年並
なす	うどんこ病	平年並	平年並		アブラムシ類	—	平年並
	すすかび病	やや多	やや多	りんご	斑点落葉病	多	多
ねぎ	さび病	多	多		褐斑病	多	多
	アザミウマ類	やや少	平年並	きく	ハダニ類	平年並	平年並

秋の病害虫防除対策

○イネ縞葉枯病

・ 縞葉枯病が発生したほ場の再生稲(ひこばえ)は、媒介虫のヒメトビウンカの増殖源と縞葉枯ウイルスの獲得源になります。早めに丁寧な耕起を行いましょ。

○麦類種子伝染性病害

・ 近年、オオムギ斑葉病やムギ類黒節病等の種子伝染性病害が増加傾向にあります。種子消毒を行うとともに、は種は適期に行いましょ。

○かんしょ サツマイモ基腐病

・ 本病は栃木県内での発生は確認されていませんが、令和3(2021)年9月現在、全国20都道県で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。健全な種苗を導入すること及び発病株の早期発見により被害の拡大を未然に防止することが重要です。

・ [サツマイモ基腐病に注意!](#)を当センターHPに掲載中です。

○いちごのアザミウマ類

・ 頂花房の開花が10月上旬以前から見られる施設では、秋期からアザミウマ類が発生しやすく、翌年の発生も早まる傾向があるため、適切に防除しましょ。

○ナシ黒星病・炭疽病、りんご斑点落葉病・褐斑病(秋季防除)

・ 病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の発生源となるため、収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく薬液がかかるよう丁寧に薬剤散布を行い、園内外の落葉を集めて適切に処分しましょ。防除の際は周辺へ飛散(ドリフト)しないよう十分注意しましょ。[植物防疫ニュース\(速報No.8\)](#)、[りんご褐斑病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

1か月気象予報(予報期間9月18日から10月17日 9月16日気象庁発表)

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。平均気温は、高い確率60%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、高い確率70%です。2週目は、高い確率60%です。3～4週目は、高い確率50%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

項目	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	10%	30%	60%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	20%	40%	40%

詳しくは農業環境指導センター(Tel 028-626-3086)までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部(@tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>)でもご覧になれます。

令和3(2021)年度 病害虫発生予報 第7号

令和3(2021)年10月22日
栃木県農業環境指導センター

病害は予防、虫害は初期防除を基本に発生を抑えましょう！

予想期間 10月下旬～11月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠
- ・ 現在の発生量はやや少ない(平年比56%：ほ場率、平年比31%：株率)。(－)
 - ・ 向こう1か月の気温は平年並～高く、降水量は多く、日照時間は少ない見込み。(＋)
- (3) 対 策
- ・ 日照不足等で、株が軟弱徒長すると発生しやすくなるので、適正な温度管理やかん水を行う。
 - ・ 予防を主体に、ベルコートフロアブル等を使用する。
 - ・ ほ場を良く観察し、初発を見逃さない。発生が見られたら、シグナムWDG等を散布する。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠
- ・ 現在の発生量は平年並(平年比62%：ほ場率、平年39%：株率)。(±)
 - ・ 向こう1か月の気温は平年並～高いが、日照時間は少ないため、施設内の温度は上がりにくい見込み。(±)
- (3) 対 策
- ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
 - ・ 化学農薬に対する感受性低下が著しいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しにくい気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。
 - ・ カブリダニ類(天敵)導入時はハダニ類が多いと失敗しやすいので、気門封鎖剤や天敵に影響の少ない薬剤を散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。
- (4) 備 考
- ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHP(ホームページ)に掲載中。

3 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠
- ・ 向こう1か月の気温は平年並～高いが、日照時間は少ないため、施設内の温度は上がりにくい見込み。(±)
- (3) 対 策
- ・ 雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、施設内及び周辺の除草を行う。
 - ・ 低密度のうちにカウンター乳剤等のIGR剤を散布する。被害が大きくなるおそれがある場合には、スピノエース顆粒水和剤等を散布する。
 - ・ 10月中旬までに開花が進んでいるほ場では、秋期のアザミウマ類の飛び込みが多くなる傾向にあり、翌年春以降の発生につながるおそれがあるので、防除を徹底する。
- (4) 備 考
- ・ [防除のポイントNo.19](#)、[アザミウマ薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターHPに掲載中。

4 トマト 黄化葉巻病(TYLCV)

- (1) 発生予想 発生量：**やや少ない**
- (2) 根 拠
- ・ 現在の発生量は少ない(平年比0%：ほ場率、株率)。(－)
 - ・ トマトのコナジラミ類の発生量は平年並(平年比81%：ほ場率、平年比138%：株率)。(±)
 - ・ 向こう1か月の気温は平年並～高く、日照時間は少ない見込み。(±)
- (3) 対 策
- ・ ウイルスを媒介するタバココナジラミの侵入を防ぐため、ハウスの開口部(出入り口、側窓、天窗)に0.4mm以下のネットを張り、特に出入り口は2重にする。
 - ・ 黄色粘着板の設置による媒介虫の捕殺やコナジラミが見られた時はコルト顆粒水和剤等を散布する。
 - ・ 発病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ビニール袋などで密封し枯死させてから処分する。
 - ・ 耐病性品種も本病に感染すると、伝染源となるため、感受性品種と同様に適正な防除をする。
- (4) 備 考
- ・ [防除のポイントNo.22](#)、[タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 なら 白斑葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は多い（平年比 244%：ほ場率、平年比 600%：株率）。（+）
 ・ 向こう 1 か月の気温は平年並～高く、降水量は多く、日照時間は少ない見込み。（+）
- (3) 対 策 ・ 施設内が多湿にならないように日中に適度な換気を行う。
 ・ 捨て刈りした葉は伝染源となるため、施設外に持ち出し、適切に処分する。
 ・ 予防を主体にセイビアーフロアブル 20 等を散布する。発生が見られたら、ストロビーフロアブル等を使用する。

6 野菜類（いちご・なす・キャベツ・レタス等）・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・ 9 月第 6 半旬までのフェロモントラップによる誘殺数はやや少ない。（-）
 ・ いちごでの発生量は平年並（平年比 100%：ほ場率、平年比 120%：株率）。（±）
 ・ 向こう 1 か月の気温は平年並～高く、日照時間は少ない。（±）
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
 ・ 幼虫の齢期が進むと被害が大きくなる上に、薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。

7 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
いちご	炭疽病	平年並	平年並	きゅうり	コナジラミ類	平年並	平年並
	アブラムシ類	少	やや少	ねぎ	さび病	多	多
トマト	灰色かび病	少	やや少		ハモグリバエ類	多	やや多
	葉かび病	少	やや少	にら	さび病	やや多	やや多
きゅうり	うどんこ病	平年並	やや多	野菜類	タバコガ類	やや少	やや少
	べと病	平年並	やや多	きく	ハダニ類	平年並	平年並

秋の病害虫防除対策

○イネ縞葉枯病

・縞葉枯病が発生したほ場の再生稲（ひこばえ）は、媒介虫のヒメトビウンカの増殖源と縞葉枯ウイルスの獲得源になります。早めに丁寧な耕起を行いましょう。

○麦類種子伝染性病害

・近年、オオムギ斑葉病やムギ類黒節病等の種子伝染性病害が増加傾向にあります。種子消毒を行うとともに、は種は適期に行いましょう。

○ナシ黒星病・炭疽病、りんご斑点落葉病・褐斑病（秋季防除）

・病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の発生源となるため、収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく薬液がかかるよう丁寧に薬剤散布を行い、園内外の落葉を集めて適切に処分しまししょう。防除の際は周辺へ飛散（ドリフト）しないよう十分注意しまししょう。[植物防疫ニュース\(速報 No. 8\)](#)、[りんご褐斑病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHP に掲載中。

○栃木県では、農業による事故等の発生防止を図るため、11月から翌年1月の3か月間を「農業危害防止運動期間」とし、「[農業ラベルの読み上げ運動](#)」を実施中です。農業は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、正しく使用しまししょう。

1 か月気象予報（予報期間 10月23日から11月22日 10月21日気象庁発表）

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、高い確率が40%です。日照時間は少ない確率が40%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	20%	40%	40%
降水量	30%	30%	40%
日照時間	40%	30%	30%

詳しくは農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jpnn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。



令和3(2021)年度 病虫害発生予報 第8号

令和3(2021)年11月19日
栃木県農業環境指導センター

施設外からの害虫の飛び込みに注意し、発生初期から適切に防除しましょう。

予想期間 11月下旬～12月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 ・発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並（平年比98%：ほ場率、平年比158%：株率）。(±)
・向こう1か月の降水量は少なく、日照時間は多い見込み。(－～±)
- (3) 対 策 ・株が軟弱徒長すると発生しやすくなるので、温度管理やかん水を適切に行う。
・発生初期のうちにフルピカフロアブル等を葉裏にもよくかかるよう散布する。曇雨天時にはくん煙剤を使用する。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 ・発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並（平年比77%：ほ場率、平年比76%：株率）。(±)
・向こう1か月の平均気温は平年並、日照時間は多い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・化学農薬に対する感受性低下が著しいため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。抵抗性が発達しにくい気門封鎖剤を活用する場合は、5日程度の間隔をおき、連続して散布する。
・天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいため、天敵導入前に薬剤を散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。
- (4) 備 考 ・[ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

3 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想 ・発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い（平年比323%：ほ場率、平年比50%：葉率）。(＋)
・向こう1か月の降水量は少なく、日照時間は多い見込み。(－～±)
- (3) 対 策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を用いた通風により、結露防止に努める。
・草勢低下は発生を助長させるので、適正な肥培管理を行う。
・発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
・予防を主体にベルコートフロアブル等を葉裏によくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・抵抗性品種に発病するレースが確認されているため、抵抗性品種を栽培しているほ場でも、発生に注意する。
・[葉かび病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

4 トマト 黄化葉巻病 (TYLCV)

- (1) 発生予想 ・発生量：**やや少ない**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は少ない（平年比0%：ほ場率、平年比0%：株率）。(-)
・コナジラミ類の発生量はやや多い（平年比156%：ほ場率、平年比170%：株率）。(＋)
・向こう1か月の平均気温は平年並、日照時間は多い見込み。(コナジラミ類の発生：＋)
- (3) 対 策 ・黄色粘着板を設置し、媒介虫の早期発見に努める。また、コナジラミ類の成虫が見られる場合は、アニキ乳剤、トランスフォームフロアブル等を散布する。
・発病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ビニール袋などで密封し、枯死させてから処分する。
- (4) 備 考 ・[防除のポイントNo.22](#)、[タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 きゅうり ベと病

- (1) 発生予想 ・発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並（平年比 94%：ほ場率、平年比 69%：葉率）。(±)
・向こう 1 か月の降水量は少なく、日照時間は多い見込み。(一～±)
- (3) 対 策 ・施設内が多湿にならないよう換気やかん水量に注意する。
・草勢低下は発生を助長させるので、適正な肥培管理を行う。
・予防を主体にランマンフロアブル等を散布する。
- (4) 備 考 ・[べと病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

6 きゅうり コナジラミ類

- (1) 発生予想 ・発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並（平年比 52%：ほ場率、平年比 155%：葉率）。(±)
・向こう 1 か月の降水量は少なく、日照時間は多い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・タバココナジラミは退緑黄化病の病原ウイルス（CCYV）を媒介する。密度が増加すると防除が困難になるので、ほ場内に黄色粘着板を設置する等、早期発見・早期防除を行う。
・薬剤感受性の低下を避けるため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- (4) 備 考 ・[タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

7 なら アザミウマ類

- (1) 発生予想 ・発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない（平年比 76%：ほ場率、平年比 11%：株率）。(一～±)
・向こう 1 か月の平均気温は平年並、日照時間は多い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・雑草はアザミウマ類の増殖源となるので、ハウス内外の除草を行う。
・早期発見に努め、密度の低い時点でスピノエース顆粒水和剤等を散布する。

8 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 ・発生量：多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い（平年比 144%：ほ場率、平年比 28%：株率）。(＋)
・向こう 1 か月の平均気温は平年並、日照時間は多い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・葉裏をよく観察し、発生が認められたら下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に気門封鎖剤やスターマイトフロアブル等を散布する。

9 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現 況	発生予想	作物名	病害虫名	現 況	発生予想
いちご	灰色かび病	少	やや少	きゅうり	うどんこ病	やや少	やや少
	アブラムシ類	少	やや少	なら	白斑葉枯病	平年並	平年並
	アザミウマ類	少	やや少	きく	アブラムシ類	やや多	やや多
トマト	コナジラミ類	やや多	多		アザミウマ類	少	やや少

○トマトキバガ

南米原産の外来性害虫トマトキバガについて、国内の一部地域における発生が確認されました。やや桃色がかった乳白色～緑白色のイモムシ状幼虫が、トマトやナス等の葉や果実を食害します。食害を受けると、葉は薄皮だけが残って白～褐変し、果実は小さな穴が空きやがて腐敗します。

11 月現在、栃木県内では発生が確認されていませんが、疑わしい症状を発見した場合は当センターまで御連絡ください。

秋の病害虫防除対策

○ イネ縞葉枯病（RSV）

ほ場の再生稲（ひこばえ）は、本病原ウイルスを媒介するヒメトビウンカの生息地や病原ウイルスの獲得源になります。早期の丁寧な耕起により、次年産での本病の発生増加を防ぎましょう。

○ 花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。

○ 同一系統の連用を避け、RACコードを参考に異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

○ 栃木県では、農薬による事故等の発生防止を図るため、11月から翌年1月の3か月間を「農薬危害防止運動期間」とし、「[農薬ラベルの読み上げ運動](#)」を実施中です。農薬は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、正しく使用しましょう。

1か月気象予報（予報期間11月20日から12月19日 11月18日気象庁発表）

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並の確率40%です。降水量は、少ない確率40%です。日照時間は、多い確率40%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	30%	40%	30%
降水量	40%	30%	30%
日照時間	30%	30%	40%

詳しくは農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせは、ツイッター「[栃木県農政部\(@tochigi_nousei\)](#)」、農業環境指導センターHP（<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>）でも御覧になれます。



令和3(2021)年度 病害虫発生予報 第9号

令和3(2021)年12月17日
栃木県農業環境指導センター

施設内の栽培環境を適正に保ち、病害虫の発生を抑えましょう。

予想期間 12月下旬～1月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 ・発生：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い(平年比250%：ほ場率)。(+)
・向こう1か月の降水量は少ない～平年並、日照時間は平年並～多い見込み。(－)
- (3) 対 策 ・多湿条件において発生しやすいので、下葉を除去し株元の風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
・発病した果実や果梗等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
・発生初期に、セイビアーフロアブル20等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・[灰色かび病薬剤感受性結果①、②](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 ・発生：**やや少ない**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比88%：ほ場率、平年比127%：株率)。(±)
・向こう1か月の降水量は少ない～平年並、日照時間は平年並～多い見込み。(－～±)
- (3) 対 策 ・軟弱徒長すると発生しやすくなるので、温度管理やかん水を適切に行う。
・発生初期のうちに、パンチョT F顆粒水和剤等を葉裏にもよくかかるように散布する。

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 ・発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比67%：ほ場率、平年比56%：株率)。(±)
・向こう1か月の平均気温は低い～平年並、日照時間は平年並～多い見込み。(±)
- (3) 対 策 ・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・天敵導入ほ場では天敵の生息状況等をよく観察し、必要に応じて追加放飼を検討する。
・化学農薬に対する感受性低下が著しいため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。厳寒期の気門封鎖剤全面散布は、天敵に対して影響があるので注意する。
・葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。
- (4) 備 考 ・[ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

4 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想 ・発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は多い(平年比234%：ほ場率、平年比179%：葉率)。(+)
・向こう1か月の降水量は少ない～平年並、日照時間は平年並～多い見込み。(－～±)
- (3) 対 策 ・多湿条件で多発するので、施設内の湿度低下に努める。日中の気温の高いときを見計らって換気を行い、過度なかん水を控える。
・収穫期の肥料切れによる草勢低下は発生を助長させるので、適正な肥培管理を行う。
・発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
・予防を主体にダコニール1000等を葉裏によくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・抵抗性品種に発病するレースが確認されているため、抵抗性品種を栽培しているほ場でも発生に注意する。[葉かび病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 なら 白斑葉枯病

- (1) 発生予想 ・発生量：**やや少ない**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比90%：ほ場率、平年比4%：株率)。(－)
・向こう1か月の降水量は少ない～平年並、日照時間は平年並～多い見込み。(－～±)

- (3) 対 策 ・施設内が多湿にならないよう、日中の気温の高いときを見計らって換気を行う。
 ・捨て刈りした葉は伝染源となるため、施設外に持ち出し、適切に処分する。
 ・発生初期にストロビーフロアブル等を散布する。

6 きく 白さび病

- (1) 発生予想 ・発生量：やや多い
 (2) 根 拠 ・現在の発生量が多い（平年比 208%：ほ場率、平年比 183%：株率）。（+）
 ・向こう1か月の降水量は少ない～平年並、日照時間は平年並～多い見込み。（-～±）
 (3) 対 策 ・施設内が多湿にならないよう、日中の気温の高いときを見計らって換気を行う。結露が感染を助長するので、暖房機の温度を明け方に高く設定し、植物表面の結露を防ぐ。
 ・予防を主体にジマンダイセンフロアブル等を散布する。

7 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
いちご	アブラムシ類	平年並	平年並	トマト	うどんこ病	平年並	やや少
	コナジラミ類	平年並	平年並		黄化葉巻病	少	少
	アザミウマ類	やや少	やや少		コナジラミ類	平年並	平年並
きゅうり	べと病	やや少	やや少	にら	アザミウマ類	やや少	やや少
	コナジラミ類	平年並	平年並	きく	ハダニ類	平年並	平年並

○ 外来害虫トマトキバガについて

南米原産の外来害虫トマトキバガが国内において初確認されました。やや桃色がかった乳白色～緑白色のイモムシ状幼虫が、トマトやナス等の葉や果実を食害します。食害を受けると、葉は薄皮だけが残って白～褐変し、果実は小さな穴が空きやがて腐敗します。

12月現在において栃木県内では発生が確認されていませんが、発生が疑われる場合はお近くの農業振興事務所又は当センターまで御連絡ください。「[トマトキバガに注意!](#)」を当センターHPに掲載中です。

○ イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率及び越冬前密度調査結果について

ヒメトビウンカ越冬世代幼虫を対象とした調査（11月実施）の結果、ウンカ類幼虫の生息密度は平年よりやや高かったものの、イネ縞葉枯ウイルスの県平均保毒虫率は2.4%と全体的に低い結果となりました。引き続き防除を継続し、低い保毒虫率を維持しましょう。

詳細については、当センターHPに掲載中の[植物防疫ニュースNo.11](#)を御参照ください。

農薬は適正に使用しましょう

- RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
- 花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。
- 栃木県では、農薬による事故等の発生防止を図るため、11月から翌年1月の3か月間を「農薬危害防止運動期間」とし、「[農薬ラベルの読み上げ運動](#)」を実施中です。農薬は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、正しく使用しましょう。

1か月気象予報（予報期間12月18日から1月17日 12月16日気象庁発表）

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は平年並みの確率50%です。2週目は低い確率50%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	40%	40%	20%
降水量	40%	40%	20%
日照時間	20%	40%	40%

詳しくは農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問合せください。

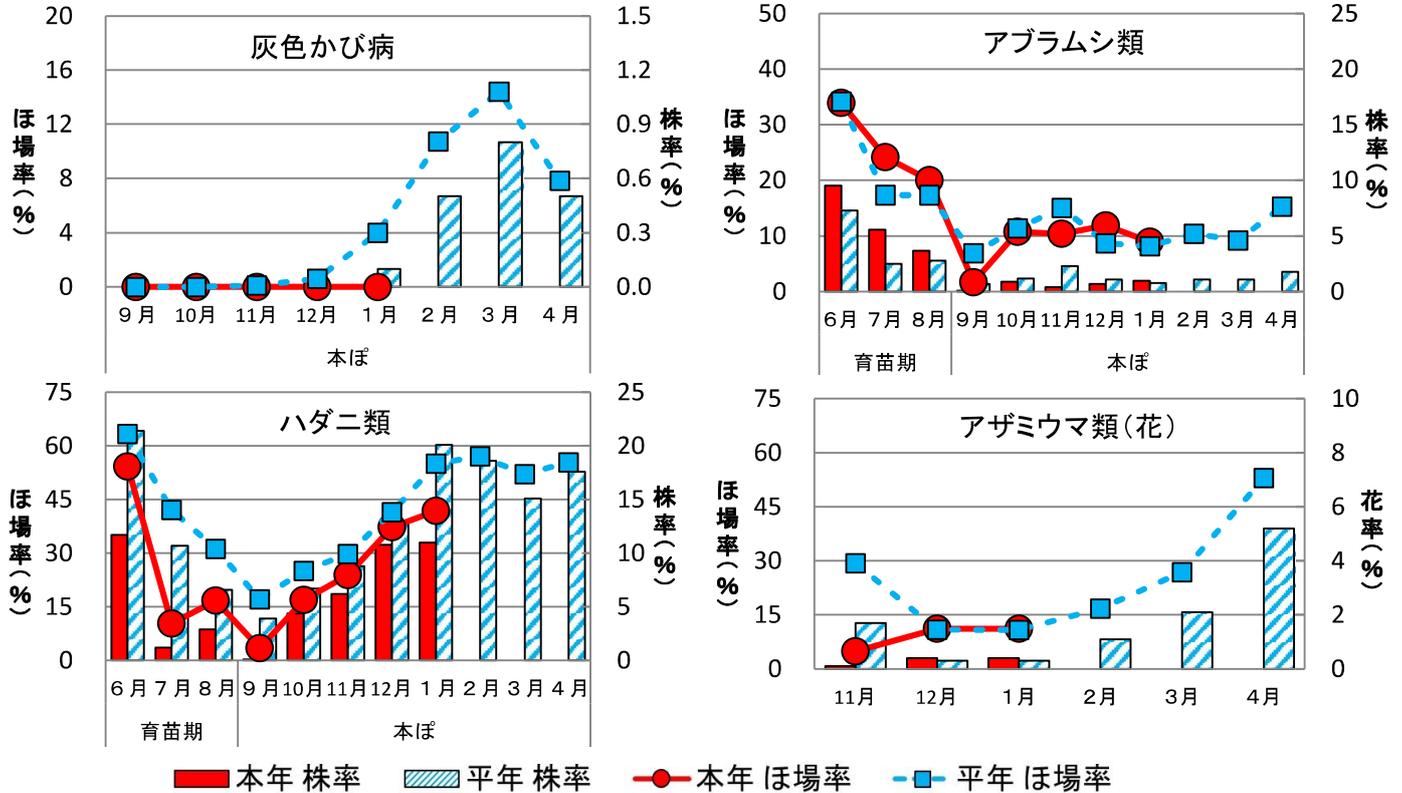
病害虫情報発表のお知らせは、ツイッター「[栃木県農政部 \(@tochigi_nousei\)](#)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。



■ 病害虫の発生状況

- ・ 灰色かび病、うどんこ病の発生は少ないです。
- ・ アブラムシ類、ハダニ類、アザミウマ類は平年並の発生です。

■ 主な病害虫の発生推移



■ 主な病害虫の発生予想と防除対策

～ ほ場をよく観察し、発生状況に応じた防除を行いましょう ～

1 灰色かび病

- (1) 発生予想
- ・ 発生量：平年並
- (2) 対策
- ・ 老化葉などを除去し、風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
 - ・ 発病した果実、果梗等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
 - ・ 予防を主体にアフェットフロアブル等を散布する。曇雨天時には、くん煙剤を使用する。
- (3) 備考
- ・ 灰色かび病薬剤感受性結果①、②を当センターホームページ(HP)に掲載中。

検定結果のリンクはこちら↓

[検定結果①](#)

[検定結果②](#)

2 アブラムシ類

- (1) 発生予想
- ・ 発生量：平年並
- (2) 対策
- ・ 発生が見られる場合は、チェス顆粒水和剤等を散布する。
 - ・ ほ場内外の雑草が増殖源となることが多いので、除草する。

3 ハダニ類

- (1) 発生予想
- ・ 発生量：平年並
- (2) 対策
- ・ ほ場をこまめに観察し、低密度のうちに防除を行う。
 - ・ 化学農薬をローテーション散布し、抵抗性の発達を抑制する。
 - ・ 化学農薬の散布回数を減らすため気門封鎖剤や天敵製剤を積極的に活用する。また、気門封鎖剤は5日程度の間隔をおき、複数回散布すると効果が高い。
 - ・ 葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。
- (3) 備考
- ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果を当センターHPに掲載中。](#)

次のページへ続く

4 アザミウマ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：平年並
- (2) 対 策 ・ 低密度のうちにマツチ乳剤[ミカンキ107アザミウマ]等のIGR剤を散布する。
・ 被害が大きくなるおそれがある場合には、スピノエース顆粒水和剤等を散布する。本剤はカブリダニ等の天敵に影響があるので、注意する。
- (3) 備 考 ・ 秋期にアザミウマ類の発生が多かった施設は、注意する。
・ [防除のポイントNo.19を当センターHPに掲載中。](#)
・ アザミウマ類薬剤感受性検定結果①、②を当センターHPに掲載中。

検定結果のリンクはこちら↓

[結果①](#)

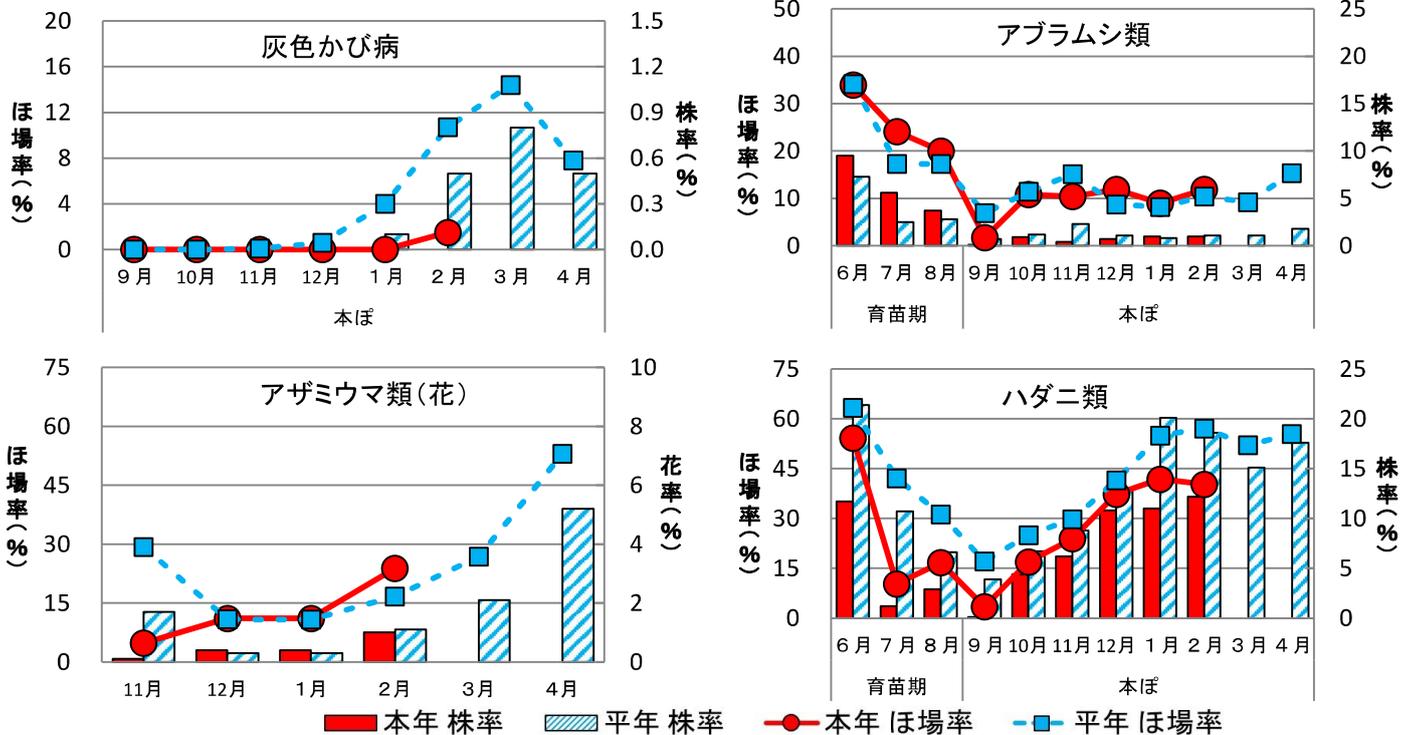
[結果②](#)

いちごGAPの実践で良い農業に取り組もう！！

■ 病害虫の発生状況

- ・ 灰色かび病の発生は少ないです。
- ・ アブラムシ類、ハダニ類の発生は平年並、アザミウマ類の発生はやや多いです。

■ 主な病害虫の発生推移



■ 主な病害虫の発生予想と防除対策

～ ハウス内の適正な温湿度管理による病害虫の発生に注意しましょう～

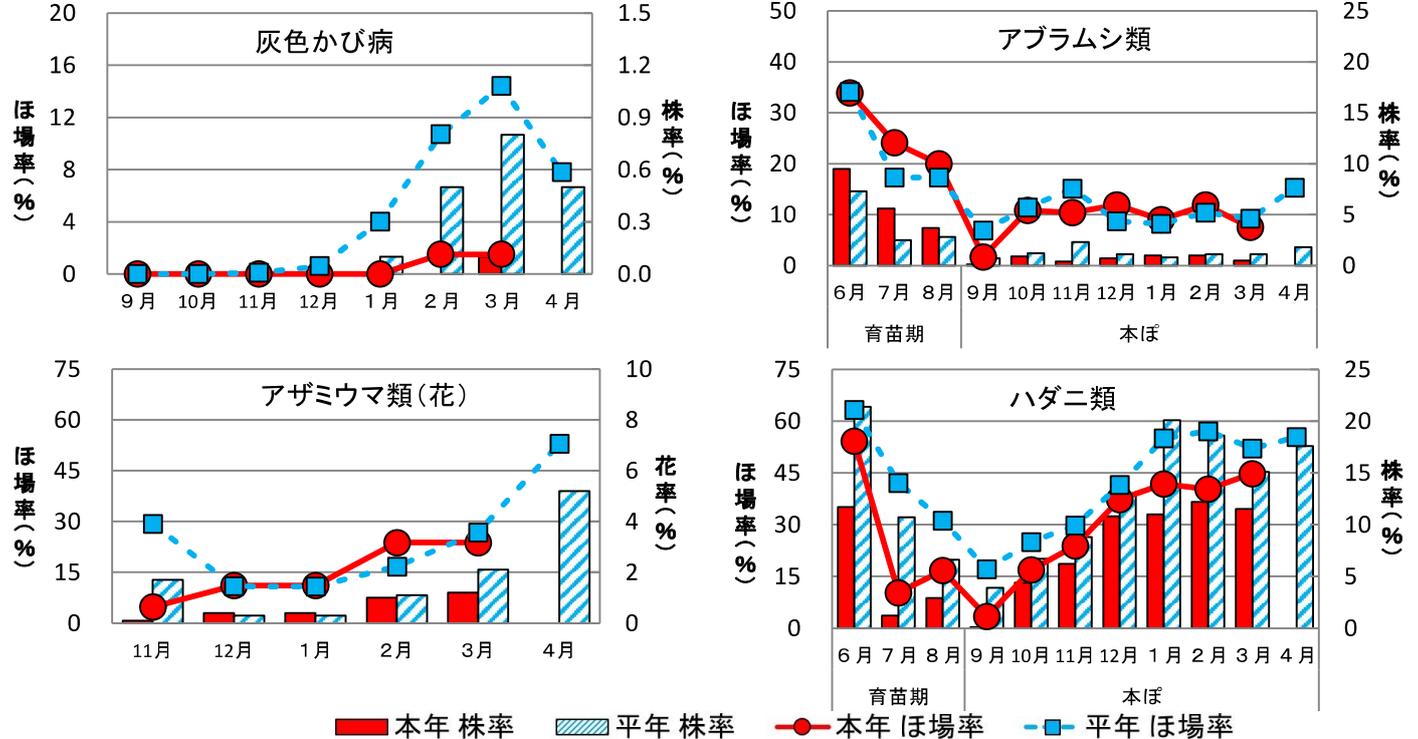
- 1 灰色かび病
 - (1) 発生予想
 - (2) 対策
 - ・ 発生量：やや少ない
 - ・ 老化葉などを除去し、風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
 - ・ 発病した果実、果梗等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
 - ・ 予防を主体にフルピカフロアブル等を散布する。曇雨天時に防除する場合には、くん煙剤を使用する。
 - (3) 備考
 - ・ [灰色かび病薬剤感受性検定結果①、②](#)を当センターホームページ（HP）に掲載中。
- 2 アブラムシ類
 - (1) 発生予想
 - (2) 対策
 - ・ 発生量：平年並
 - ・ 発生が見られる場合は、ウララDF等を散布する。
 - ・ ほ場内外の雑草が増殖源となることが多いので、除草する。
- 3 アザミウマ類
 - (1) 発生予想
 - (2) 対策
 - ・ 発生量：やや多い
 - ・ 低密度のうちにカウンター乳剤等のIGR剤を散布する。
 - ・ 被害が大きくなるおそれがある場合には、ディアナSC等を散布する。本剤はカブリダニ等の天敵に影響があるので、影響日数を考慮して散布する。
 - (3) 備考
 - ・ 秋期にアザミウマ類の発生が多かった施設は、発生に注意する。
 - ・ [防除のポイントNo.19を当センターHPに掲載中。](#)
 - ・ [アザミウマ類薬剤感受性検定結果①、②](#)を当センターHPに掲載中。
- 4 ハダニ類
 - (1) 発生予想
 - (2) 対策
 - ・ 発生量：平年並
 - ・ ほ場をこまめに観察し、低密度のうちに防除を行う。
 - ・ 抵抗性の発達を抑制するため、気門封鎖剤や天敵製剤を積極的に活用する。また、化学農薬を使用する場合はローテーション散布する。
 - ・ 気門封鎖剤は5日程度の間隔をおき、複数回散布すると効果が高い。
 - ・ 葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。
 - (3) 備考
 - ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果を当センターHPに掲載中。](#)

いちごGAPの実践で良い農業に取り組もう！！

■ 病害虫の発生状況

- ・ 灰色かび病の発生は少ないです。
- ・ アブラムシ類、ハダニ類、アザミウマ類の発生は平年並です。

■ 主な病害虫の発生推移



■ 主な病害虫の発生予想と防除対策

～ 病害虫の発生をよく観察し、適切な防除を行いましょう～

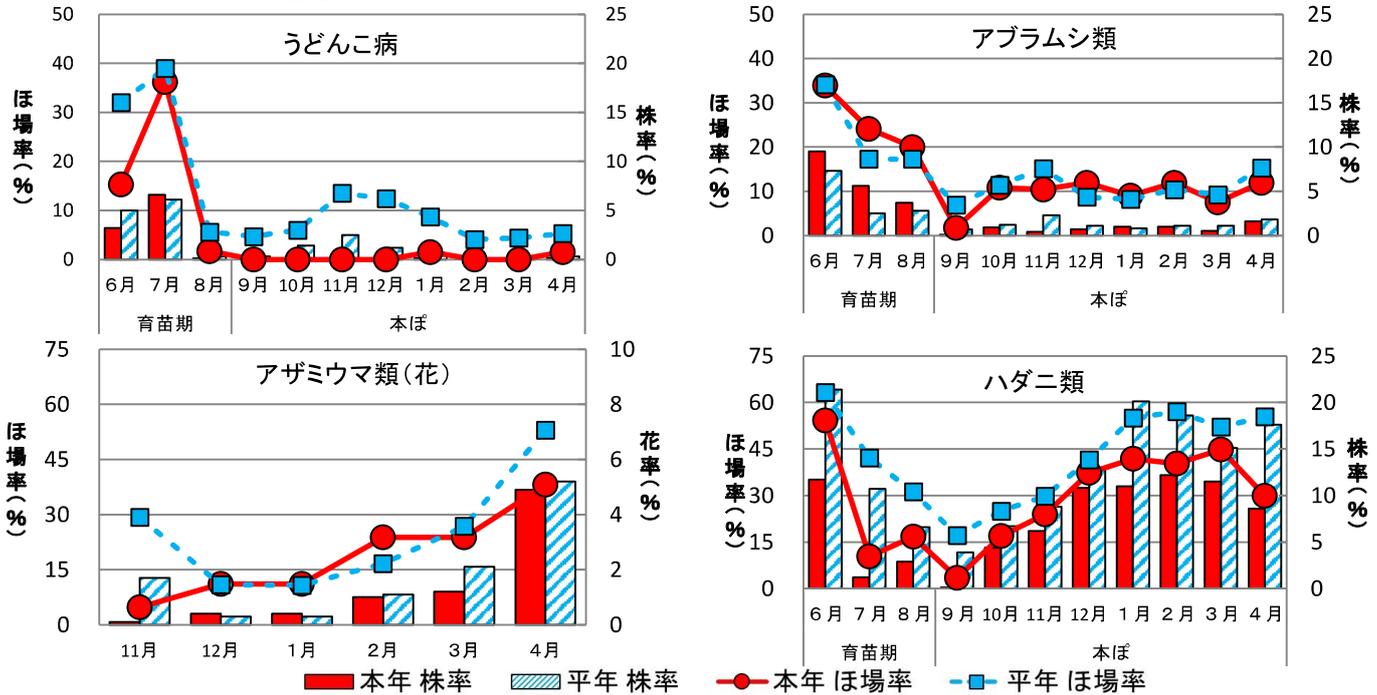
- 1 灰色かび病
 - (1) 発生予想
 - (2) 対策
 - ・ 発生量：少ない
 - ・ 老化葉などを除去し、風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
 - ・ 発病した果実、果梗等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
 - ・ 予防を主体にベルコートフロアブル等を散布する。曇雨天時に防除する場合には、くん煙剤を使用する。
 - (3) 備考
 - ・ [灰色かび病薬剤感受性検定結果①、②](#) を当センターホームページ（HP）に掲載中。
- 2 アブラムシ類
 - (1) 発生予想
 - (2) 対策
 - ・ 発生量：やや多い
 - ・ 発生が見られる場合は、ベネビア0D等を散布する。
 - ・ ほ場内外の雑草が増殖源となることが多いので、除草する。
- 3 アザミウマ類
 - (1) 発生予想
 - (2) 対策
 - ・ 発生量：やや多い
 - ・ 低密度のうちにマッチ乳剤[ミクシイアザミウマ]等のIGR剤を散布する。
 - ・ 被害が大きくなるおそれがある場合には、スピノエース顆粒水和剤等を散布する。本剤はカブリダニ等の天敵に影響があるので、影響日数を考慮して散布する。
 - (3) 備考
 - ・ [防除のポイントNo.19](#) を当センターHPに掲載中。
 - ・ [アザミウマ類薬剤感受性検定結果①、②](#) を当センターHPに掲載中。
- 4 ハダニ類
 - (1) 発生予想
 - (2) 対策
 - ・ 発生量：やや多い
 - ・ 抵抗性の発達を抑制するため、気門封鎖剤や天敵製剤を積極的に活用する。
 - ・ 天敵導入ほ場でハダニが多発生した場合は、天敵に影響の少ない薬剤を散布し、天敵の追加散布を行う。
 - ・ 化学農薬を使用する場合はローテーション散布する。
 - ・ 葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布すると効果的である。
 - (3) 備考
 - ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#) を当センターHPに掲載中。

いちごGAPの実践で良い農業に取り組もう！！

■ 病害虫の発生状況

- ・ **うどんこ病**の発生はやや少ないです。
- ・ **アブラムシ類**、**アザミウマ類**の発生は平年並、**ハダニ類**の発生はやや少ないです。

■ 主な病害虫の発生推移



■ 主な病害虫の発生予想と防除対策

～病害虫防除を徹底し、最後まで生育・品質の良いいちごの出荷に努めましょう～

- 1 うどんこ病
 - (1) 発生予想
 - ・ 発生量：やや少ない
 - (2) 対策
 - ・ 軟弱徒長すると発生しやすくなるので、適正な温度管理や下葉かきを行うなど、ほ場管理に留意する。
 - ・ 予防を主体にフルピカフロアブル等を葉裏にもよくかかるよう散布する。
 - (3) 備考
 - ・ 硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるため、天敵を導入した場合は長時間のくん煙処理は避ける。
- 2 アブラムシ類
 - (1) 発生予想
 - ・ 発生量：やや多い
 - (2) 対策
 - ・ 発生が見られる場合は、チェス顆粒水和剤等を散布する。
 - ・ ほ場内外の雑草が増殖源となることが多いので、除草する。
- 3 アザミウマ類
 - (1) 発生予想
 - ・ 発生量：やや多い
 - (2) 対策
 - ・ 被害が大きくなるおそれがある場合には、ディアナSC等を散布する。本剤はカブリダニ等の天敵に影響があるので、影響日数を考慮して散布する。
 - (3) 備考
 - ・ 秋期にアザミウマ類の発生が多かった施設は、発生に注意する。
 - ・ [防除のポイントNo.19を当センターHPに掲載中。](#)
 - ・ [アザミウマ類薬剤感受性検定結果①、②](#)を当センターHPに掲載中。
- 4 ハダニ類
 - (1) 発生予想
 - ・ 発生量：平年並
 - (2) 対策
 - ・ ほ場をこまめに観察し、低密度のうちに防除を行う。
 - ・ 抵抗性の発達を抑制するため、気門封鎖剤や天敵製剤を積極的に活用する。また、化学農薬を使用する場合はローテーション散布する。
 - ・ 気門封鎖剤は5日程度の間隔をおき、複数回散布すると効果が高い。
 - ・ 葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。
 - (3) 備考
 - ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果を当センターHPに掲載中。](#)

いちごGAPの実践で良い農業に取り組もう！！

＜令和3(2021)年産いちご主要病害虫の発生経過＞

育苗期の病害虫の発生は全般に少なく推移しました。本ぼでは、保温開始後に炭疽病の発生が目立ちましたが、期間中は降水量が少なく日照時間が多かったために他の病気は少なく移行しました。ハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類は平年よりやや少ない～平年並の発生でした。

1 炭疽病

＜発生状況＞

育苗期は平年よりやや多い発生で、本ぼでの発生も年内まではやや多く推移しましたが、株の処分により発生株率は平年並からやや少ない発生でした。

＜防除対策＞

伝染を予防するため、水の跳ね返りのないかん水を行い、発生前から予防的に薬剤散布を行うとともに発病株は速やかに取り除き、ほ場外で処分しましょう。

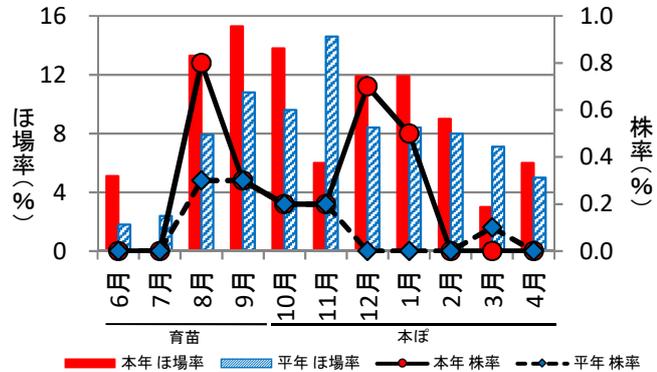


図1 炭疽病の発生ほ場率・株率

2 萎黄病

＜発生状況＞

育苗期から本ぼまで平年より少ない発生でした。

＜防除対策＞

病原菌は土壌中で4～5年以上生存するため、本ぼで発生が見られたほ場では土壌消毒を適切に行いましょう。

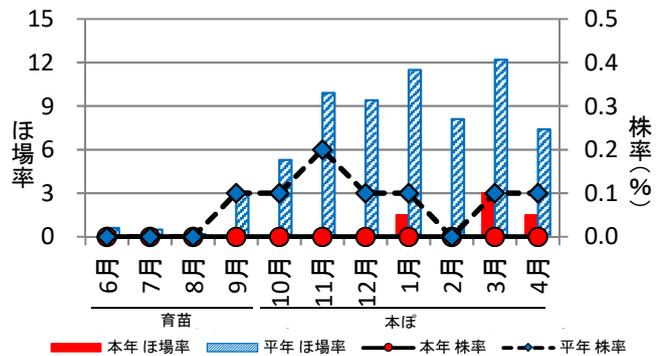


図2 萎黄病の発生ほ場率・株率

3 灰色かび病

＜発生状況＞

2月頃から発生が増加しましたが、少なく推移しました。

＜防除対策＞

本ぼでは、ハウス内が多湿にならないよう、かん水量や換気に注意するとともに薬剤を丁寧に散布しましょう。

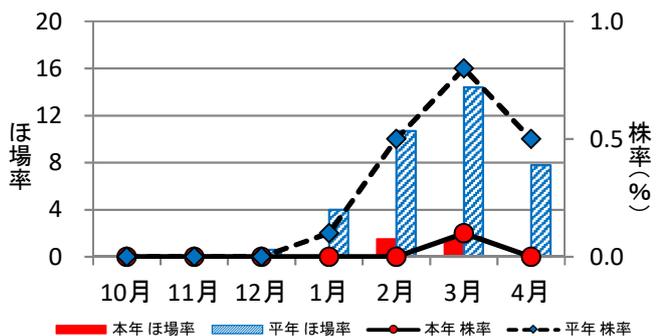


図3 灰色かび病の発生ほ場率・株率

4 うどんこ病

＜発生状況＞

育苗期の7月の長雨で平年並になりましたが、8月以降は少なく推移しました。

＜防除対策＞

育苗期の防除を徹底し、本ぼに病原菌を持ち込まないようにしましょう。

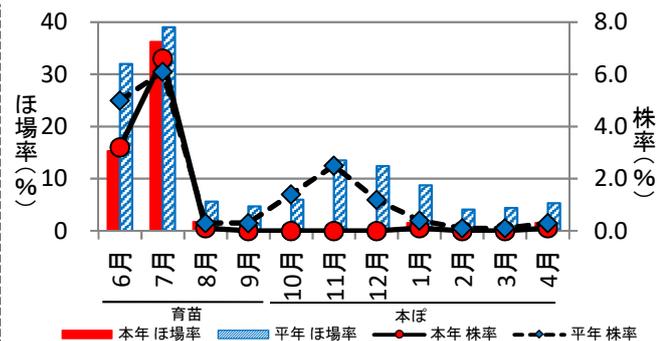


図4 うどんこ病の発生ほ場率・株率

5 ハダニ類

<発生状況>

育苗期から本ぼの栽培期間を通して発生が見られましたが、平年よりやや少ない～平年並の発生でした。

<防除対策>

早期発見・早期防除に努め、天敵製剤（カブリダニ類）を使用する場合は、ハダニ類の発生前に放飼しましょう。

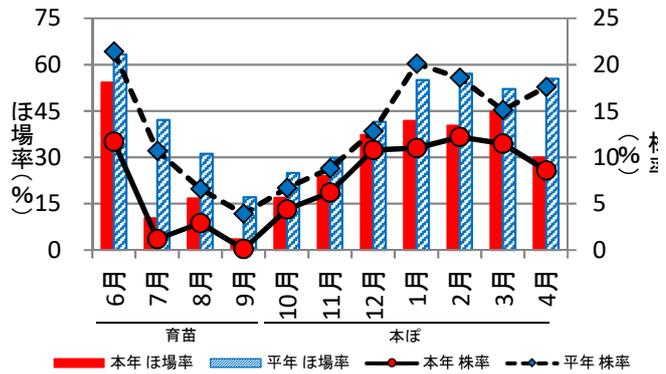


図5 ハダニ類の発生ほ場率・株率

6 ハスモンヨトウ

<発生状況>

本ぼで10月から12月に発生が見られ、平年より少ない～平年並の発生でした。

<防除対策>

幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、早期発見・早期防除に努めましょう。また、若齢幼虫が集団でいるうちに葉ごと摘み取り、処分しましょう。

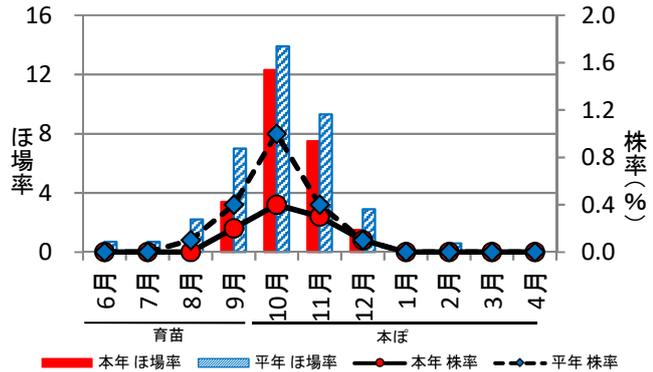


図6 ハスモンヨトウの発生ほ場率・株率

7 アブラムシ類

<発生状況>

育苗期から本ぼの栽培期間を通して発生が見られましたが、7月は平年よりやや多い発生でしたが、おおむねやや少ない～平年並の発生でした。

<防除対策>

早期発見・早期防除に努めるとともに、葉裏にも薬剤がよくかかるよう丁寧な薬剤散布を心がけましょう。

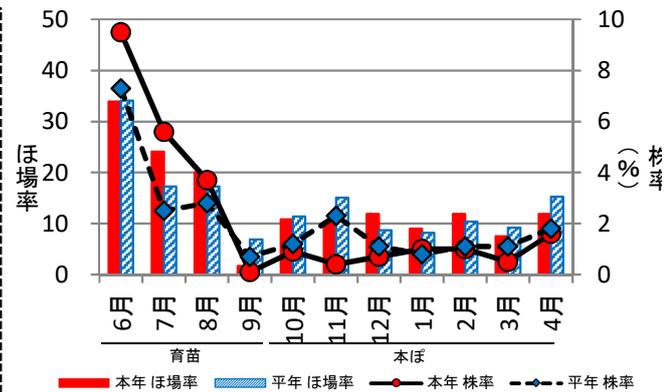


図7 アブラムシ類の発生ほ場率・株率

8 アザミウマ類

<発生状況>

開花始めから発生が見られ、2月以降に増加し、平年並の発生となりました。

<防除対策>

開花初期や春先はハウス外からの侵入が増加するので、適切に防除しましょう。

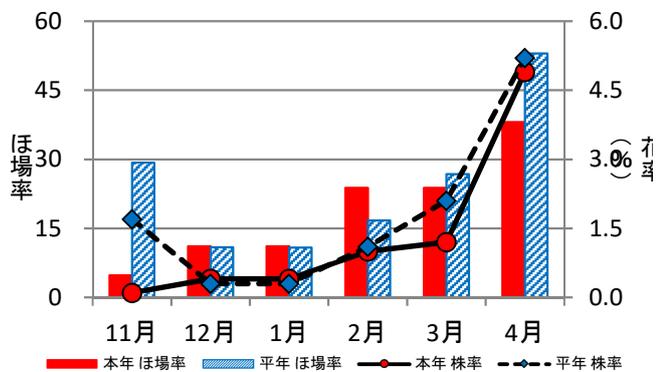
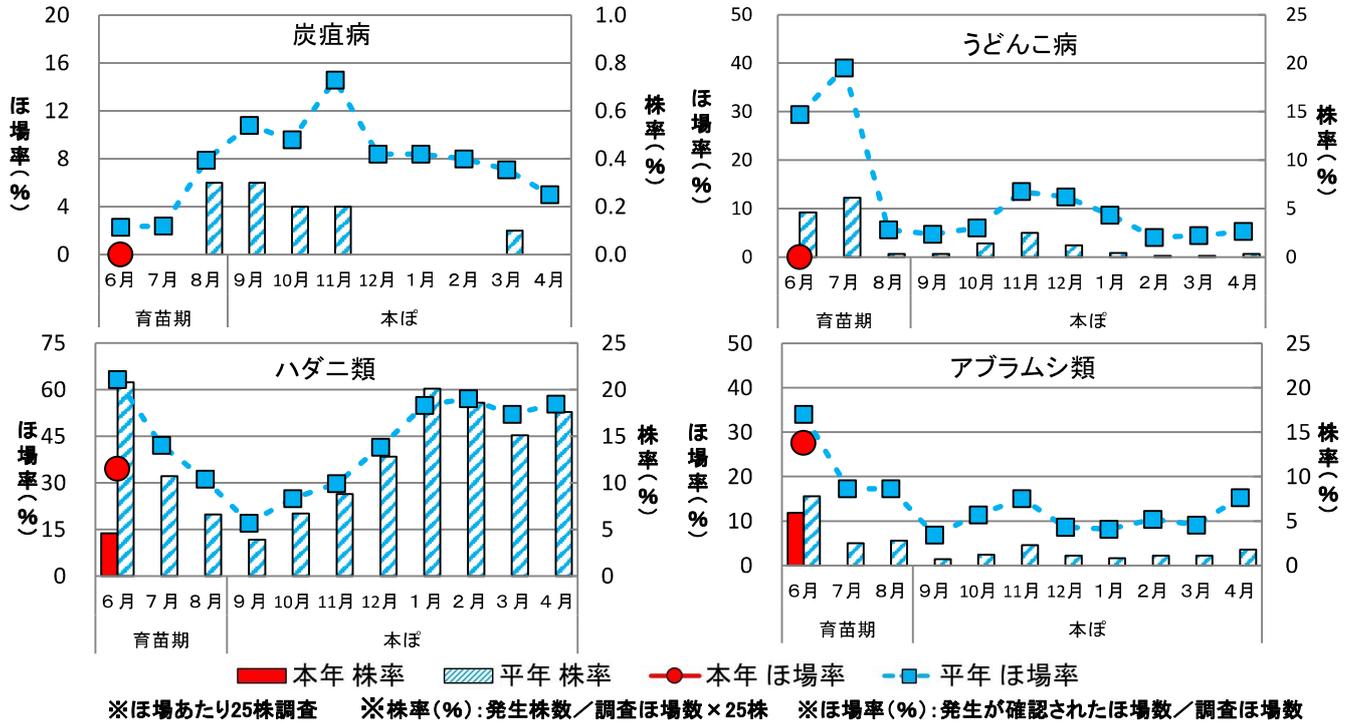


図8 アザミウマ類の発生ほ場率・花率

育苗期間中に病虫害防除を徹底し、本ぼへの持ち込みを防止しましょう。

■ 病害虫の発生状況（親株床・育苗）

- ・炭疽病、うどんこ病の発生は少ないです。
- ・ハダニ類はやや少なく、アブラムシは平年並の発生です。



■ 主な病害虫の発生予想と防除対策

1 炭疽病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：やや少ない
- (2) 対策 ・ 胞子がかん水のしぶきに混じって飛散、伝染するので、頭上かん水は控え、点滴チューブを用いるなど、できるだけ水の跳ね返りのない方法でかん水を行う。
- ・ 発病してからの防除は困難なので、予防を主にベルコートフロアブル等を散布する。

2 うどんこ病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：やや少ない
- (2) 対策 ・ 軟弱徒長すると発生が多くなるので、適正な施肥管理やかん水を行う。
- ・ 予防を主体にベルコートフロアブル等を散布する。

3 ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：やや少ない
- (2) 対策 ・ ほ場をこまめに観察し、低密度のうちに防除を行う。
- ・ 葉かき後は薬剤がかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。

4 アブラムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：平年並
- (2) 対策 ・ 発生初期から薬剤をローテーション散布する。
- ・ 雑草はアブラムシ類の増殖源になるので、ほ場内外を除草する。

■ 今月のトピックス うどんこ病について

- ・クモの巣状～粉状白色のカビによる病害で、梅雨時期の7月上旬に最も発生が多くみられます。長雨による過湿で軟弱徒長や過繁茂した株で多く発生しています。
- ・葉かきにより株間の風通しを良くし、かん水に注意し、施設内の換気を行います。薬剤防除は予防剤を主体に葉裏にも良くかかるよう散布し、本ぼに移行しないよう防除を徹底します。



葉表の病徴



葉軸の病徴



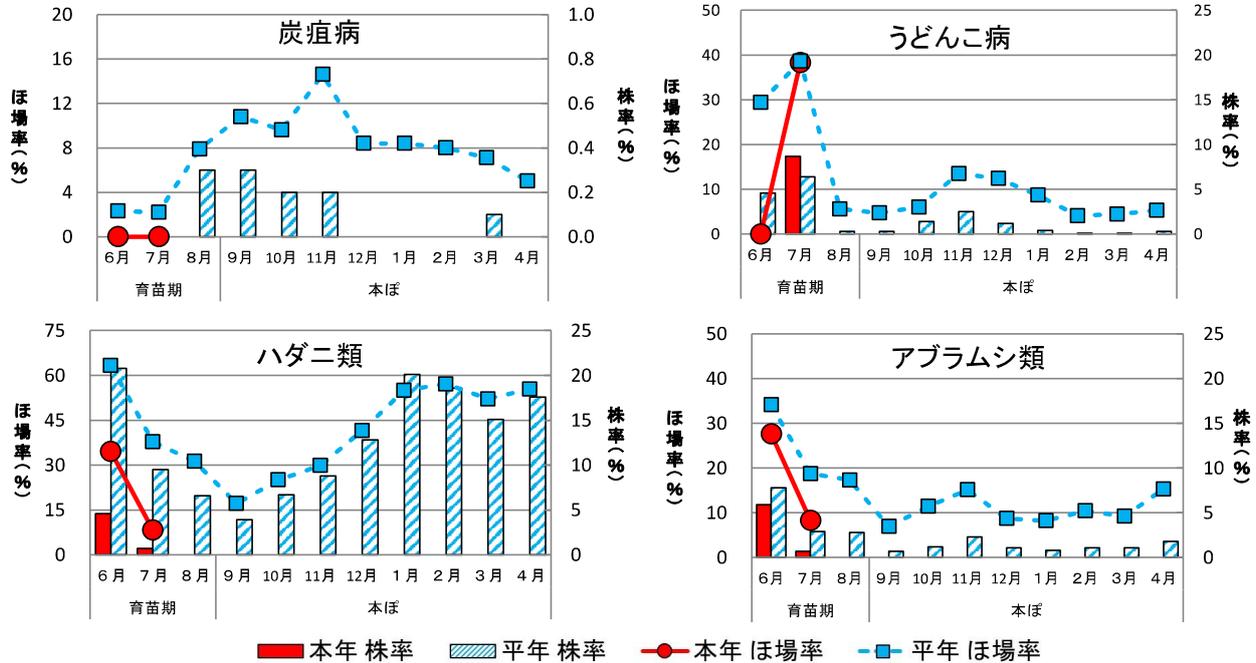
果梗の病徴

いちご病害虫情報第2号（7月）

令和3（2021）年7月16日
栃木県農業環境指導センター

■ 病害虫の発生状況（親株床・育苗）

- ・炭疽病の発生は少なく、うどんこ病の発生は平年並です。
- ・ハダニ類、アブラムシの発生はやや少ないです。



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 主な病害虫の発生予想と防除対策

1 炭疽病

- (1) 発生予想 ・発生量：やや多い
- (2) 対策
 - ・点滴チューブを用いるなど、水の跳ね返りが少ない方法でかん水を行う。
 - ・また、ほ場内の排水を良くし、胞子の飛散による他株への伝染を防ぐ。
 - ・発病してからの防除は困難なので、予防を主体に薬剤散布を行う。
 - ・発病株は見つけ次第取り除き、ほ場外で処分し、速やかに治療効果のあるサンリット水和剤等を散布する。

2 うどんこ病

- (1) 発生予想 ・発生量：平年並
- (2) 対策
 - ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適正な施肥管理やかん水を行う。
 - ・予防を主体に薬剤散布を行う。

3 ハダニ類

- (1) 発生予想 ・発生量：平年並
- (2) 対策
 - ・ほ場をこまめに観察し、低密度のうちに防除を行う。
 - ・薬剤抵抗性の発達を抑制するため、気門封鎖剤や天敵製剤を積極的に活用する。
 - ・化学農薬を使用する場合は系統の異なる薬剤をローテーション散布する。
 - ・気門封鎖剤は5日程度の間隔をおき、複数回散布すると効果が高い。
 - ・葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。

4 アブラムシ類

- (1) 発生予想 ・発生量：平年並
- (2) 対策
 - ・発生初期から系統の異なる薬剤をローテーション散布する。
 - ・雑草はアブラムシ類の増殖源になるので、ほ場内外を除草する。

■ 今月のトピックス 炭疽病について

- ・炭疽病はいちご栽培で最も警戒されている病害となっている。
- ・炭疽病菌は高温・多湿を好むため、梅雨明けの育苗中から発病が目立つようになる。葉上の斑点型病斑（図1）や葉柄等の黒色陥没病斑（図2）、青枯れ的に萎れた株（図3、図4）を見逃さないよう注意深く観察し、罹病した株は早期に取り除き、ほ場外で適切に処分する。
- ・病斑上に形成された多量の胞子が雨やかん水の水滴の跳ね返りによって飛散し伝染する。さらに植物体の濡れ時間が長いと感染・発病が助長される。
- ・炭疽病の特徴的な症状として、クラウン内部にまで褐変が及ぶ（図5）。また、湿潤下に置くと特徴的な鮭肉色の胞子塊（分生子層）が形成される（図6）。



図1 葉上の斑点型病斑



図2 葉柄の黒色陥没病斑



図3 定植後に萎れた株



図4 萎凋して垂れ下がる(親株)

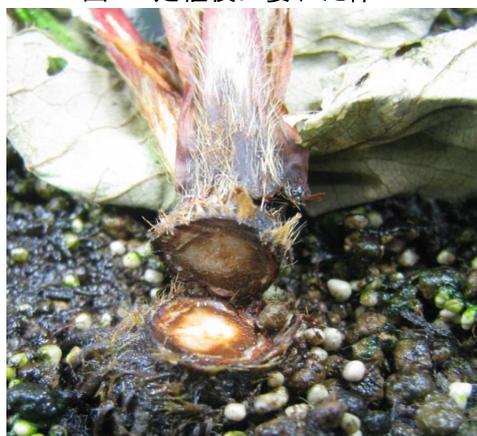


図5 褐変している萎凋株のクラウン断面



図6 湿潤下に保持した病斑
高温多湿下で病斑上に鮭肉色の粉状から粘塊状の胞子塊(分生子層)を形成する。

GAPの実践で安全・安心ないちご生産に取り組みましょう！